

沖縄だれにも書かれなかつた戦後史

佐野眞一

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

I  
天皇・米軍・  
沖縄県警

## 「お約束」の島から「物語」の島へ

沖繩耽溺者<sup>マヤシヤンシヤ</sup>のメルクマールを沖繩訪問の歴史的キャリアや、訪問の頻度だけではかるなら、私は沖繩耽溺者の範疇<sup>はんちゆう</sup>にはおそらく入らない。一九七二（昭和四十七）年五月十五日の本土復帰前にこの南国の島を訪ねたことはないし、仕事らしい仕事で初めて訪ねたのは九七年暮れのことだから、むしろ沖繩初心者<sup>マヤシヤンシヤ</sup>の部類だといつていいだろう。

これより約二十年前、近海にジュゴンが棲むことで知られる八重山諸島の小浜島に遊び半分の仕事で行ったことはあるが、それは「沖繩体験」というにはあまりにも短い滞在に過ぎなかった。

沖繩取材「初体験」ともいうべき九七年の訪問時、私は中内ダイエーの盛衰をルポする長期連載を抱えていた。沖繩本島と宮古島を訪ねたのは、中内ダイエー急成長の「原資蓄積過程」とも比喩<sup>ひよ</sup>できる牛肉安売りの秘密を探るのが目的だった。

オーストラリア産の仔牛を沖繩で大量に肥育し、それをダイエーが輸入する。まだアメリカの統治下にあったこの当時、沖繩の貿易には特例措置で関税がなかったため、ダイエーが沖繩から輸入する牛の値段は格安だった。

ダイエー急成長の最初のスプリングボードとなった牛肉安売りの秘密は、沖繩の畜肉業者と組んだこの「三角貿易」システムにあった。言いかえれば、沖繩はダイエーの発展を約束した収益構造の見

えない「ロンダリング・ランド」だった。

最初、那覇で登記されたこの畜産会社の法人登記簿を追っていくと、さらに興味深いことがわかった。同社の本社所在地はある時点から、宮古島のリゾート地区に移り、業務内容も畜肉加工から、福岡ドームなどの土地売買を目的とする不動産業務に変わっていた。しかもその会社は、表にはまったく出てこない中内のファミリーカンパニーだった。

格安の牛肉で消費者の胃袋を満足させて儲けた金を、今度は一族の土地投資の欲望にそのまま注ぎ込む。肉が土地に化ける。沖縄には、中内ダイエーに代表される、戦後日本人の欲望の肥大化の軌跡が露骨に刻まれていた。「はじめに」でも述べたが、ここでもまた、沖縄は日本の高度経済成長を裏支える隠された土地だった。

戦後高度経済成長の象徴ともいうべき中内ダイエー発展の秘密を沖縄で垣間見て以来、私にとって沖縄は、満州といわば表裏一体を成す重要なテーマとなった。

○四年十月に産業再生機構入りが決まり、経営破綻はたが明らかになった中内ダイエーと沖縄の関係をもう一度引き合いに出せば、○五年春に出版された奥野修司の『ナツコー沖縄密貿易の女王』（文藝春秋）にこんな箇所がある。

敗戦後間もない沖縄には、大密貿易時代と呼ばれる時代があった。この時代、東シナ海を股にかけた海賊まじまがいの海人が横行し、ありとあらゆる物資が取引された。

「薬は香港の船が運んできたんやけど、これはぜんぶ今のダイエーの中内さんが買いはったわ。ペニシリンは高いから、盗られんように田岡（一雄・山口組組長）引用者注）さんの子分らが警備したんか

な。まあ、ダイエーができたのもお父さんのおかげとちやうやろか」

戦後沖縄密貿易の女王といわれたナツコが取引した、神戸在住華僑の娘の証言である。

人肉食いの噂がつきまとうフィリピンの地獄の戦場から、飢えと怒りと人間存在の底知れない不条理を背負って復員した中内功が、神戸のブラックマーケットに現れて、最初の闇商売を始めたことはよく知られている。中内はこの時代を振り返って、「女と麻薬以外のものはすべて売った」と私に語っている。

中内は「戦後神戸から出て大きくなったのは、山口組とダイエーだけや」という名台詞も残している。そのそもその源泉となったのが、大密貿易時代の沖縄だった。

中内ダイエーの最深部を取材するため、タクシーで沖縄じゆうを走り回っているとき、座席の前のプレートに、見るからに凶暴そうな男の指名手配写真が貼られていることに気がついた。名前も又吉カマーと、いかにも沖縄の犯罪者らしい響きがあった。

タクシー運転手は独特の抑揚がある沖縄口で、「旭流会系のヤクザです。ピストルで警官を二人殺したさあー。ヤマトに逃げたけど、また沖縄に戻ったという噂もあるさあー。もしかすると、ここらあたりに隠れているかもしれないらんさあー」と言って、車の外に広がる高々としたサトウキビ畑に目をやった。

風にそよぐサトウキビ畑はあくまでも青々と繁り、指名手配中の殺人犯が身を隠すには格好の場所のように思われた。運転手の脅し半分の冗談を聞いて、本当に又吉カマーなる凶悪犯がそこにひそんでいるような気がして、灼熱の暑さを一瞬忘れた。

それにもまして、タクシー運転手ののんびりした沖縄口の口ぶり、それとはまったく似合わない

殺伐たる話題とのあまりに大きな落差が、ひどく印象に残った。沖縄では血なまぐさい殺人事件も、明るい観光写真のように語られる。

次に沖縄を訪ねたのは九九年、時の宰相だった小渕恵三の評伝（『凡幸伝』（文藝春秋））を取材するためだった。

念願の二〇〇〇年沖縄サミットを実現しながら、突然の死により、サミットの議長にはならず終わった小渕は、早稲田の雄弁会時代、沖縄に何度も行き、本土復帰運動に参加している。

小渕は首相官邸での私のインタビュに答えて、

「沖縄には学生時代からの思い入れもある。沖縄戦で自決した大田実海軍少将の『沖縄県民かく戦えり。県民に対し後世格別の御高配を賜らんことを』という遺書もある。それらが諸々重なって、沖縄サミットの実現となった」と言った。

へ——最近、『ナビイの恋』という映画を観たそうですね。沖縄を舞台とした。

小渕 うん、観た。でも映画に感動したから沖縄サミットを決めたわけじゃないぞ。オレもそこまですべて単純じゃない（笑）

サミットの前景気に沸く沖縄取材中、最も印象に残ったのは、沖縄を代表する大企業の國場組元会長（ミキバ）の國場幸一郎が語ったこんなエピソードだった。

「あれはたしか自民党が大敗した九八年七月の参院選のときでした。小渕さんがその応援で沖縄に来

た。そのとき小淵さんは私にこう言ったんです。『もしいまの（大田昌秀）知事をかえることができれば、私は沖繩に最大のものをプレゼントする』と。

まだ自民党の総裁選に出る前です。沖繩サミットが決まったとき、私はすぐそのことを思い出しましたよ。ああ小淵さんの言っていた「最大のプレゼント」とはこのことだったんだな、ってね」

國場はそんな言葉で、小淵の先見の明を言わんとしたようだった。だが、私にはむしろ、沖繩県政は国政が握る、さらに言うなら、その沖繩県政は國場組が握る、と言っているように聞こえた。

実際その晩、那覇一の飲み屋街の松山のバーに私を誘った國場組の関係者は、「大田昌秀はわれわれの言うことを聞かなくなったので、稲嶺恵一にかえたんだ」と、平然と言いつつ放ったものだった。

二〇〇〇年七月の沖繩サミットの取材でも、國場組を代表とする沖繩の大企業と、沖繩県政の露骨なまでの癒着ぶりを見せつけられた。サミット会場にあてられた名護のブセナホテル・ビーチリゾートは、沖繩県と名護市、それに國場組、稲嶺知事の出身母体である石油会社の「りゅうせき」などの共同出資で建設された第三セクター方式の超高級リゾートホテルである。

しかし、それ以上に実感させられたのは、沖繩における国政の信じられないほどの専横ぶりだった。サミット会場に向かうタクシー運転手は、こう言っつてひとりごちた。

「サミット警備のため、ヤマトから二万二千人のおまわりさんが応援に来ています。その弁当は現地沖繩の弁当屋さんに任せられると思っつていただけど、冷凍のシヤケ弁当が北海道から毎日空輸されてます。もちろん、すべて鈴木宗男の利権です。宗男は沖繩サミットでどれだけ儲けたかわからんさあー」

播鉢ちばの底が抜けそうなゴマスリで小淵内閣の官房副長官におさまつた鈴木宗男は、「親分”野中広務（官房長官）の威もあつて、当時絶大な権勢をふるつていた。

その運転手の話では、政府関係者や報道陣の車両も本土から運んだため、サミット期間中の沖縄のタクシーは、まったく商売があつたりの状態だったという。

サミット期間中の取材の収穫は、小渕人脈を通じて、沖縄の政財界を牛耳る大物たちに会えたことだった。「沖縄の四天王」という言葉を初めて聞いたのも、そのときだった。

沖縄のゴッドファーザーと呼ばれた國場組創設者の國場幸太郎、奴隷同然の人身売買の境遇から這いあがって大城組を創った大城鎌吉、戦前は警察官、戦後は独立行政区の宮古群島知事から実業界に転じてオリオンビールを創業した具志堅宗精、「沖縄糖業の父」と呼ばれた宮城仁四郎。彼らの人生は、さすが「四天王」といわれるだけのことはあつて、それぞれ一冊の本が書けるほどドラマチックだった。

波瀾万丈というなら、稲嶺恵一前沖縄県知事の父親の稲嶺一郎の人生も、「四天王」たちの生涯にひけをとらない。

学生時代の小渕の沖縄側の身元保証人だった稲嶺は、インドネシアの海軍武官府出向時代に敗戦を迎えたが、大東亜共栄圏は不滅と、インドネシア独立運動に参戦し現地で投獄された。戦後は米石油メジャーのカルテックスと提携、独占企業の琉球石油（現・りゅうせき）を設立した。稲嶺はインドネシア独立運動の功により、戦後、インドネシアのスハルト政権から国賓待遇で迎えられ、アセアン（東南アジア諸国連合）を動かす男といわれた。

戒厳令下の沖縄サミット期間中に聞いた、戦後沖縄をつくった男たちの話は、どれもこれも初耳で、アドレナリンが身内から大量に分泌してくるようなエピソードばかりだった。

そこには、太平洋戦争で唯一地上戦の戦場となり、「鉄の暴風」と称される米軍の砲撃で軍民合わせて十八万八千人もの死者を出したことや、敗戦後、米軍の駐留により沖縄の全面積の一〇・パーセント、在日米軍基地の七五パーセントが沖縄に集中しているといった、沖縄を語るとき必ず引き合いに出される祝詞めいた「お約束」の言葉がまったく混入していなかった。

沖縄住民の三人に一人が死んだといわれる奇酷な戦争体験も、「基地のなかに島がある」といわれる状況も、沖縄がいまも孕んでいる切実な現実である。

しかし、あえて言うなら、そうしたステレオタイプ化した言説によって、われわれはこの島に流れたありのままの戦後の時空間を遮断されてきた面がある。「戦争」と「基地」という「オールマイティー」なカードを切られると、たちまち首うなだれて沖縄を「聖地化」し、ひたすら跪拝し懺悔することは、当の沖縄にとつても「被害者意識」に拍車をかけるだけではないか。

「はじめに」でも述べたように、大江健三郎や筑紫哲也に代表されるヤマトの進歩的文化人たちが、沖縄に「怒られに行く」という、うんざりする構図はもういいかげんにした方がいい。そろそろ沖縄自身が「被害者意識」の桎梏から解放されてもいい時期ではないのか。そうでなければ、いまや沖縄観光のメッカとなっている「ひめゆりの塔」も、靖国化の道を辿るだけである。

沖縄の戦後史を、手垢のついた「大文字」言葉ではなく、誰の胸にも届くホンネの「小文字」言葉だけで書いてみたい。沖縄を「お約束」の島から解放して、「物語」の島として描きたい。そんな思いにとらわれはじめたのは、いままで一度も聞いたことがない彼らの話に耳を傾けたのが、最初のきっかけだった。

それにしても、沖縄に関する報道と、現実に見聞する沖縄との目もくらむようなこの落差はどうだ

ろう。しかし、そう言う私自身が、本書の取材に本格的に入る前、沖縄出身の有名人で知っていたのは、軍用地の代理署名拒否という方法で日本政府にケツをまくってみせた大田昌秀元知事と、沖縄ダンスミュージックを迫力をもって世間に知らしめた沖縄混血の歌姫・安室奈美恵くらいのものであったのだから、あまりエラソーなことは言えない。

日本最南端の島というよりアジアの入り口という方がふさわしい、極彩色の土産物が並ぶトロピカルムードの国際通り（那覇市）を歩き、牧志公設市場で豚の顔を茹でたチラガアの笑ったような表情と、熱帯魚みたいに色とりどりの魚に驚嘆し、「象のオリ」と呼ばれる読谷村の米軍通信施設を見て、基地の島を実感したつもりになっていたのだから、いまにして思えば、随分とかわいいものである。

本題に入る前に、すでに報じられていながら、あまり一般には知られていない事実を、一、二紹介しておきたい。それは沖縄を語るとき、絶対に看過することのできない、いわば沖縄問題の必須知識だと思ふからである。

一つは沖縄と天皇の関係である。

〇七年に刊行された『卜部亮吾侍従日記』（朝日新聞社）を読むと、病に倒れた昭和天皇が、最後の最後まで沖縄訪問を切望していたことがよくわかる。卜部は一九六九（昭和四十四）年十月一日に従となつてから〇二（平成十四）年三月十一日に死去する直前まで、毎日欠かさず日記を書き続けた宮内庁の官僚である。

昭和天皇と沖縄の関係といえば、従来、敗戦から二年後の一九四七（昭和二十二）年九月に行われた「天皇会见」のみ、よく知られていた。「天皇会见」とは、GHQの外交局長（主席政治顧問）の

W・J・シーボルトに対し、昭和天皇が沖縄問題に関して次のような要望書を提出したことを指す。

①米国が沖縄その他の琉球諸島の軍事占領を継続するよう希望する。これは米国に役立ち、また日本に保護を与えることになる。

②沖縄に対する米国の軍事占領は、日本に主権を残したままでの長期租借——二十五年ないし五十年、あるいはそれ以上——の擬制にもとづくべきであると考えている。

③このような占領方法は、米国が琉球諸島に対して永続的野心を持たないことを日本国民に納得させ、またこれにより他の諸国、とくにソ連と中国が同様の権利を要求するのを阻止するだろう。

この「琉球諸島の将来に関する天皇見解」は、当然のことながら提出当時は極秘扱いとされた。その内容が明らかになったのは、要望書の提出から三十年あまりたった一九七九（昭和五十四）年四月発行の雑誌「世界」に掲載された「分割された領土」という論文のなかで、筑波大学助教授の進藤榮一がすっぱ抜いたからである。

そのこともあつて、昭和天皇は死ぬまで沖縄に強い負い目を感じていた。

戦後、昭和天皇は全国各地を行幸したが、唯一足を踏み入れなかった、というより、足を踏み入れられなかったのが、沖縄だった。沖縄をアメリカに「人身御供」として差し出したといわれても仕方のない前記のメッセージが、文字通り昭和天皇の「足枷」となった。

一九七五（昭和五十）年に開催された沖縄海洋博に、天皇の名代として招かれた皇太子（現・天皇）夫妻が、「ひめゆりの塔」の慰霊に訪れたとき、過激派による火焰ピンの洗礼を受けた。それは昭和

天皇の身代わりとなった厄災といってもよかった。

琉球新報のベテラン記者によれば、その夜、那覇の飲み屋では沖縄県警のノンキャリアたちが、カチャーシーで乱舞する姿が何組も見られたという。

昭和天皇は一九八七（昭和六十二年）に開催された「海邦国体」に沖縄訪問をすることを楽しみにしていたが、直前に病に倒れ、実現はかなわなかった。このとき昭和天皇は、その無念さを「思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを」という歌に託している。

昭和天皇は皇太子時代の一九二一（大正十）年、ヨーロッパ外遊の途次、軍艦「香取」に乗って沖縄本島に上陸している。わずかに九時間の滞在だったが、県庁や首里城も訪問している。

「ひめゆりの塔」で過激派から火焰ビンを投げつけられた現天皇・皇后が先帝の昭和天皇がやり残した戦争犠牲者の慰霊の旅を続けていることはよく知られている。

とりわけ昭和天皇がついに再訪できなかった沖繩に対する思いは強く、八月十五日の終戦記念日、八月六日と九日の広島、長崎の原爆の日と並んで六月二十三日の沖繩戦終結の日を、「お慎みの日」として外出を控え、皇居で黙禱もくごうを捧げている。

沖縄訪問にも熱心で、皇太子・皇太子妃時代に五回、即位後も三回沖繩を訪問している。皇太子・皇太子妃時代の天皇・皇后が沖繩を初訪問して火焰ビンを投げつけられた反皇室感情は、度重なる沖縄訪問によって、いまはほとんど解消されたといつてよい。

天皇・皇后は琉歌を詠み、沖縄出身の国語学者の外間守善ほかまもりよしから「おもしろそうし」のご進講を受けている。病に倒れた昭和天皇の名代として「海邦国体」に出席したとき、皇太子・皇太子妃の要望で、沖縄タイムスと琉球新報の定期購読を始めたことはほとんど知られていない。

もう一つ指摘しておきたいのは、沖縄の地政学的位置づけの歴史的変遷である。元外交官の岡崎久彦は、沖縄の米軍基地の戦略的重要性について、PR誌の「草思」(二〇〇〇年七月号)でおおむね次のように語っている(「沖縄を巡る戦略的思考の勧め」)。

沖縄が返還されたとき、日米共同声明に、「韓国の安全は日本にとって緊要の要素、台湾の安全は日本にとって重要な要素」という文言の「韓国・台湾条項」が入った。日米安保条約を見てもわかるように、アメリカの最大の関心事は、ずっと朝鮮半島と台湾海峡にあった。

ところが、沖縄返還と軌を一にするように、ソ連の覇権国家化が急速に進んだ。北海道にソ連が侵攻してきたら、といった議論ばかりが言われるようになり、日米安保条約はソ連脅威のための施策だと思われるようになって、ソ連からはるか遠方にある沖縄の重要性がすすみはじめた。けれど、ソ連の崩壊で冷戦構造が終わると、元に戻って、朝鮮半島と台湾海峡を両にらみするためには、沖縄がやはり重要な位置を占めていることに日米双方が気づきはじめた……

米軍基地を沖縄にこのまま固定化しておいていいのかという根本議論を別にしていうなら、岡崎の見立ては、極東地区におけるその後の国際関係の変化を見る限り、当たっているとわがざるを得ない。ここに来て竹島問題や尖閣諸島問題が、日韓、日中問題の焦点になってきているように、たしかに沖縄をとりまく東シナ海の海域や、日米共通の軍事的関心事である朝鮮半島付近の日本海域の荒波は、にわかには高まりはじめています。

沖繩県の高校として甲子園ではじめて一勝をあげた輝かしい経歴をもつ首里高校元ピッチャーの又吉民人（沖繩県経営者協会専務理事）は、沖繩に住んでいると、アメリカから見たアジアの地政学の最前線がいま奈辺にあるか、いやでもわかるという。

「ジープなど米軍車両に施された迷彩色でわかるんです。ベトナム戦争当時は濃い緑で、明らかにジヤングル用なんです。ところが、湾岸戦争や今度のイラク攻撃では、その迷彩色が、砂漠用の薄いベージュ色にかわった。アメリカの軍事戦略にとっては、サウジアラビアもイラクも同じアジアなんです」

天皇制という「時間軸」にいまも直面させられている沖繩は、同時に、「太平洋のキーストーン（要石）」といわれた沖繩戦当時のアメリカの軍事戦略の「空間軸」にいまなおきつく縛られている。そして、その軛はさらに強まろうとしている。

本書の企画がスタートしたのは、〇二年の夏だった。にもかかわらず、連載の開始がこれほど大幅に遅れてしまったのは、弁解じみた言い方を許してもらえれば、その間に、石原慎太郎論、小泉純一郎論、満州論という三つの大きな仕事を立て続けに入ってしまったからである。しかし、やや牽強附会（ひがひ）きみにいうなら、それらの仕事は沖繩論を書くための準備段階のようなものだったということもできる。

慎太郎は都知事としてより、日米共同声明に盛り込まれた朝鮮半島、台湾問題の極右派のイデオログとして知られ、尖閣諸島、竹島問題では韓国と「支那」を挑発するアブナイ発言をつづけている。また小泉は有事関連三法やイラク特措法を成立させ、自衛隊のイラク派兵を断行するなど、アメリカ

カ追隨の姿勢をはつきりと打ち出して、沖縄を再びキナ臭い空気で覆おうとしている。満州と沖縄に  
関する私の仮説については、すでに述べた通りである。

それらの仕事の合間を縫って、沖縄通いをつづけた。遊び半分の最初の沖縄行きから数えれば、沖  
縄訪問はこれで十回以上になるから、沖縄耽溺者の初心者くらいには入れてもらえるかもしれない。

沖縄本島北部の山原から南端の糸満まで、本島をほぼ全周したし、沖縄密貿易のルーツを探るため、  
晴れた日には台湾が見えるといわれる日本最西端の与那国島にも行った。十回あまりの取材を通じて  
実感したのは、沖縄の変貌と、これに呼応した沖縄に注がれるまなざしの変容だった。

約三十年前の最初の訪問時、那覇の国際通りは米兵であふれていた。だが、いま通りを歩く外国人  
の数は、東京・六本木の方がはるかに多い。沖縄ミュージックは、わざわざ頭に沖縄とつけるまでも  
ないほど人口に膾炙した。

NHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」(〇一年放映) 人気や、沖縄野菜のゴーヤの天敵のウリミバエ  
の全滅作戦によるゴーヤの本土上陸もあって、沖縄の「辺境」ムードはすっかり薄れた。男も女も沖  
縄特有の濃い顔は影をひそめ、仲間由紀恵や山田優など本土出身とあまり変わらぬ風貌のタレントが、  
沖縄を代表する顔になった。そこにも、歳月の流れが感じられた。

沖縄への移住者は年々増加し、年間の観光客は五百万人を超えた。空港から首里までモノレールが  
走り、天久の元米軍住宅地には那覇新都心が急ピッチで建設中である。

だが、所得は全国最低、失業率は全国最高という経済のひずみは変わらず、基地経済と公共事業に  
依拠した体質は一向に改善されていない。

沖縄を「戦争」と「基地」の悲劇の島として描くのは簡単である。だが前にも述べたように、そう

とらえることはこの島の半分の真実でしかない。

沖縄は自分らが置かれた歴史的地理的境遇を、時代状況に応じて最大限利用してきた、きわめてしたたかな島でもある。

琉球王国は中国の朝貢国家として出発した。その体制に亀裂が入ったのが、一六〇九（慶長十四）年に起きた薩摩藩の島津侵入事件である。

ここから琉球王国は、日本の幕藩体制のなかに組み入れられた。しかし、これによって琉球は「日本」になったわけではない。中国の冊封体制はこれ以降もつづいた。中国の朝貢国でありながら、近世日本の国家体制の傘下にも入る。こうした矛盾は、これまで「日支両属」と呼ばれてきた。

だが、琉球史の専門家の高良倉吉（琉球大学教授）は、「日支両属」という言い方は正確ではないと主張する。

〈日本の封建国家に従属し、中国皇帝の冊封をうけたとはいっても、琉球の土地・人民を直接的に統治したのは琉球国王であり、その統治機関たる首里王府であった。そこで、このような多義的な事情をカウントにいれたうえで、最近の歴史家は近世琉球の基本的性格を「幕藩体制のなかの異国」と表現するようになっていゝ（『琉球王国』岩波新書）

「幕藩体制のなかの異国」の琉球が、名実ともに「日本」のなかに組み入れられたのは、一八七九（明治十二）年の「琉球処分」からである。これによって琉球王国は強制的に崩壊させられ、沖縄県が生まれた。

敗戦によって、沖縄はアメリカ軍の支配下に置かれ、一九五二（昭和二十七年）年のサンフランシスコ講和条約と日米安保条約の批准により、琉球列島は日本から正式に分離され、アメリカの民政府が間接支配する琉球政府の管轄するところとなった。

琉球に施政権が返還され、再び沖縄県として「本土復帰」するのは、前述したように一九七二年のことである。

東シナ海に浮かぶこの小さな弧状列島は、近世、近代、現代にわたる約四百年の歴史のなかで、中国、日本、アメリカ、そしてまた日本と、めまぐるしく「宗主国」を変えていった。

戦後沖縄を語ることの困難さは、ひとえに、こうしたまさに多義的な性格を持つ沖縄の特殊性に起因している。

戦後沖縄の実像を正確に写しとるためには、最低限、虫の目と鳥の目を兼備した複眼レンズが必要である。それは、大状況の概説を生き生きとした物語に転位させ、逆に、些細な日常を世界と日本の投影として描くということ意味する。

重要なのは、沖縄が置かれた「大枠」の状況を語ることではない。そうした歴史的地理的制約をむしろプラスに転化し、その変転する状況のなかで、したたかに生き抜いてきた人間たちひとりひとりの物語を語ることである。

私はこの取材で、これまでまったく耳にしなかった話を夥しく聞いた。とても信じてもらえそうにない光景を各所で目撃した。本書ではそれをいわばゴーヤチャンプルー風のごった煮状態のまま報告していきたい。

具体的に言うなら、それは、「くしまししょうねえ」といった独特のやさしい沖縄口で、人殺しの陰惨な場面を語る小指のないヤクザの空恐ろしくもあり、笑えもする物語である。さらには、戦後沖縄の歴史と風土の化身のようなフィリピン混血のヒットマンの哀切な物語である。

あるいは、本土の右翼団体に使<sup>し</sup>喚<sup>ま</sup>されたテロリストに瀕死の重傷を負わされながら、そのテロリストと泡盛を呑<sup>の</sup>みあう仲になった教職員組合幹部の沖縄独特の人間関係を象徴するような物語であり、琉球新報と沖縄タイムスという二大「左翼紙」に割って入ろうとして敗退していった第三の新聞社の秘話に属する物語である。

そして、「牛殺し」で有名なあの大山倍達<sup>オウチ</sup>をしのぎ、地上最強といわれた精力絶倫の空手家や、沖縄の金融界や沖縄県政を動かすといわれる軍用大地主、暴力団とつるんだ悪徳警官、米軍情報や左翼情報をとるため暗躍する公安関係者や警察のスパイたちの存在が、この「美ら海」の物語に、さらに怪しげな彩りを添えることになるだろう。

私は公平を期すため、県警本部長や県警OBだけでなく、裏世界に蠢<sup>蠢</sup>くアウトローたちの話もつぶさに聞いた。

彼らの濃厚なキャラクターと、アドレナリンを分泌させずにはおかない破壊力ある話は、連載をなかなか書きだせないでいた私にとって大きな刺激剤となった。

ある暴力団組長は警察出身の大物政治家の名を挙げ、一本（二千万円）贈ったらガサ入れが収まった、とほとんど聞き取り不能のネイティブ沖縄口で凄<sup>ま</sup>んで見せた。

ある経済ヤクザは、映画「L.A.コンフィデンシャル」でトップ屋役を演じた短軀猪首の性格俳優ダニー・デビートにあんまり雰囲気<sup>雰囲気</sup>がそっくりだったので、話より顔の方が気がなった。

それ以上に笑ったのは、その二人に再度接触を試みたとき、一人は私文書偽造、一人は拳銃不法所持でバクられ、仲良く沖繩刑務所に入っていたことだった。まことに沖繩ヤクザは、琉球料理以上の味がある。

それもさることながら、戦後沖繩とどう対峙するかの躊躇していた私の背中をドンと突き飛ばし、なかなか定まらなかった「立ち位置」を決定づけたのは、沖繩に行く度、ナーベラ（ヘチマ）の味噌煮や豆腐ヨーを肴に泡盛を酌み交わす琉球新報のベテラン記者が言った一言だった。

九五年九月に起きた米兵三人による小学生少女レイプ事件について話していたときだった。この事件は沖繩住民八万五千人を集める大抗議集会となり、あらためて米軍基地問題の深刻さを本土に突きつけた。

その話題から、彼は突然こんな昔話をはじめた。

「沖繩県警のベテラン刑事から突然、呼び出しを受けたことがあります。ところが、県警に行くと、その刑事が部屋にいない。周りに尋ねると、中庭の方に出て行ったという。そこで中庭に回ると、ドラムカンで何かを焼きながら泣いている。見ると、全部、昔捜査に使った証拠写真なんです。女性の局部に竹槍のようなものを突っ込んだり、異物をむりやり押し入れたところを写した凄惨な写真ばかりでした。

間もなく退職するという刑事は、僕の方を振り向いて、『おい、よく見ておけ。アメリカはこんなことをする国なんだ。でも、日米地位協定の壁に阻まれ、結局迷宮入りにさせられた事件が多かった。これはその証拠写真だ。オレにはもう用がなくなつた。お前は新聞記者だろ。この写真のことを時々思い出していい仕事してくれよ』と、涙を浮かべながら言った。沖繩の新聞記者として、いちばん大

切なことを殴られるように教えられたような気がしました」

京都大学大学院教授で社会学者の大澤真幸は、「世界」(二〇〇〇年八月号)で九五年の少女レイプ事件についてこんな意味のことを述べている(「普遍的な公共性はいかにして可能か」)。

米軍が島の中心部を占拠しているという事実は、沖縄自体がレイプ状態にあることを容易にアナロジーさせる。その一方で、その占拠によって沖縄が経済的利益を得ているという反論がいつも用意されている。しかし、その反論は有効性をもたない。それは、レイプされた女性に対して「お前だって感じていたじゃないか」という反論に等しい……

しかし、何度もいうように、私は沖縄を日本の暗部を一身に背負わされた被害者の島という文脈だけで語ろうとは思わない。逆に一九三〇(昭和五)年の台湾原住民の大量殺戮事件(霧社事件)や、ベトナム戦争の前線基地になったことを引き合いに出し、加害者としての沖縄を言い立てる議論にも与しようとは思わない。それは、沖縄に付着した被害者意識に異議申し立てする反論のための反論という以外、あまり意味をもつとは思えない不毛な見方だと思うからである。

忘れてならないのは、被害、加害の「大文字」議論にはさまれて、当の沖縄人たちが、戦後紡いできた可笑しくも物悲しい物語が封殺されようとしていることである。私は本書で、その封印をすべて開封するつもりである。

## 歴史に翻弄された沖縄県警

一八七九（明治十二）年の「琉球処分」以降、約百三十年間にわたる近代沖縄の歴史は、大きく三つに時代区分できる。明治から一九四五（昭和二十）年六月二十三日の沖縄戦終結までのヤマト世、米軍占領下のアメリカ世、そして一九七二（昭和四十七）年五月十五日の本土復帰から現在までの第二のヤマト世の三つである。沖縄の近現代史はそのまま、世替わりの歴史である。

中国の朝貢国として、同国の冊封体制下にあった琉球王国時代から語り継がれてきた古い言い伝えに、「物呉いしど、我御主」という言葉がある。物をくれる人こそ、わが主人という意味である。

沖縄は近代に入ってから、中国、日本、アメリカ、そしてまた日本を「主人」としてきた。この沖縄ならではの言葉は、沖縄人の事大主義的な節操のなさを批判するとき、よく使われる。沖縄研究の草分け的存在の伊波普猷も、この言葉を挙げて、沖縄人のもつ最大の欠点と批判した。

また一九六九（昭和四十四）年十一月二十一日に行われた佐藤（栄作）・ニクソンの共同声明で、沖縄の本土復帰が決定したときいち早く沖縄入りした評論家の大宅壮一は、「現代」（昭和四十五年二月号）に寄稿した「沖縄住民百万人を叱る」というレポートで次のように述べている。

（彼らは歴史的、地理的にいって島を支配する時の権力に対してつねに従順にならざるを得ない。さ

らに進んで、支配者には最大限の忠誠をつくさなければならぬという状態になる。なみの忠誠心では足りなくなってくる。アブノーマルとも見られる積極的な忠誠心を示さない限り、自分はおろか家族全体の生命にも危機が及ぶ。

その結果、いかなる主人に対しても、ひたむきな忠誠を誓う習慣が身につけてしまった。主人をハラの底で恨みながら、最大限の忠誠心を示すという矛盾がこの土地に根を下ろしているのだ。

こうした歴史の変転を伴った沖縄の特殊性は、沖縄県警が辿った数奇な運命のなかに最も鮮明な像として炙りだされている。ここで沖縄県警の歴史を少し詳しく述べるのはそのためである。

北海道から九州にいたる各都道府県の警察本部は、わが国に近代的警察制度が導入されて以来、戦前は内務省、戦後は警察庁に支配されてきた。具体的にいえば、各都道府県の警察本部長などトップの任命権は、中央政府の人事権下におかれてきた。

ところが沖縄の場合、敗戦から本土復帰までの二十七年間はその軛から外れた。警察組織のトップには、本土から送り込まれたキャリアではなく、地元から選出されたノンキャリアが就くという時代が戦後約三十年にわたってつづくのである。

『沖縄県警察史』は、太平洋戦争の戦闘の激化と、その後につづく敗戦の混乱によって解体を余儀なくされた沖縄県警の様子を、次のように述べている。

〈沖縄県警察は一九四五年二月下旬、戦局の緊迫に伴い、警察の平常業務を停止し、(中略)これ以上の団体行動は不可能になったため一九四五年六月九日夜、轟の壕(糸満市)において荒井警察

部長は悲壮な解散命令を出し、ここに明治十二年以来に亘る沖縄県警察は消滅したのである」

その後、米軍の収容所が沖縄の各地に設けられ、すべての権限は軍政府の地区隊長が握った。地区隊長によって収容所ごとに警察署が設置され、チーフと呼ばれる署長や、シビリアンポリス（CP）と呼ばれる即席の警官が任命された。

「その当時、任命基準はまったくなく、体格の良い者等の中から地区隊長が独断で任命しており、にわか仕立ての素人警察官が多数出来上がったのである」

それが一応の陣容を整えるのは、日本が無条件降伏した一九四五年八月十五日だった。この日、沖縄では各地区の収容所から選出された住民代表が集まり、米軍の諜報部隊（CIC）の嚴重なチェックを経て、軍政府の諮問機関の「沖縄諮詢会」が発足した。

ここを母体にして生まれた沖縄民警察が、組織としての戦後沖縄警察のスタートとなった。初代部長となったのは、大正年間に沖縄県警の警察官となり、戦前に那覇署長などの要職を歴任した仲村兼信だった。仲村は戦後の一九五二（昭和二十七）年四月、米軍統治下で発足した琉球政府の初代警察局長にも選出されている。

その仲村が書いた『沖縄警察とともに』（私家版）のなかに、戦前の沖縄県警がおかれた特殊な事情が、言葉少なに述べられている。

私が巡査の頃は、署長といえは全部他県出身者が占めていたが、次第に県人の地位も向上し、一

九二九（昭和四）年には県出身で最初の警視が生まれた。それまでは沖縄出身で課長になると、「土人課長採用ノ件」（傍点引用者）という辞令が渡された時代だった……

仲村は警部・警部補試験に合格し、一九二六（大正十五）年に東京警視庁への出向を命ぜられた。そのときのことを仲村は、ふつうなら、巡査部長の待遇だが、警視庁では格下げされ巡査のままだったと、回想している。

明らかな差別待遇である。戦前、沖縄の小学校では方言を駆逐するため、沖縄口ウチナーグチを使った生徒に首から「方言札」をぶら下げるあからさまな差別教育が行われた。

これは沖縄人ウチナーを徹底的に「日本人」化しようとするヤマト政府の教育方針からきたものだった。『日本人』の境界』（新曜社）の著者の小熊英二は同書のなかで、「文明」化教育と「日本人」化教育を比較する形で、以下のように述べている。

「『文明化』を強調しすぎることは、ある種の危険をともしなかつた。ヨーロッパ諸国の植民地教育においては、「文明化」を掲げることは、問題なく宗主国による支配の正当化となりえた。しかし日本にとっては、文明とは欧米のものであつた。「文明化」のみを掲げれば、住民の憧憬や忠誠心は日本ではなく、日本の敵である欧米にむかつてしまうことになりかねなかつた」

「鉄の暴風」といわれた沖縄戦下、標準語を喋れない住民は「米軍のスパイ」と見なされ、日本兵に殺戮された。また復帰前は言うに及ばず、最近まで「琉球人はお断り」の張り紙が首都圏や関西圏の

アパートに貼られた。それもこれも、戦前の差別教育がもたらした悲劇であり受難だった。そして、ここから元沖縄県知事の大田昌秀が言うところの「醜い日本人」観が広範に形成されていくことになった。

戦後沖縄民警察の初代部長となった仲村兼信は、前掲書のなかで、琉球警察が誕生する前の沖縄民警察時代のいいかげんさについてもふれている。

民警察時代の警官には、戦前の囚人がドサクサにまぎれて「にわか警察官」になった例も珍しくなかった。彼らは戦時中に刑務所が解放されたため自由の身になったが、行くところもないので真っ先に米軍に投降した。米軍は早々と降伏した彼らに好感をもって、重要なポストを与えたので、世にも珍妙な囚人警官の誕生となった……

沖縄ヤクザの発生起源についてはおおいおい述べていくが、その源流の一つは、米軍の軍需物資を掠奪する「戦果アギヤー」といわれる敗戦直後の窃盗徒党集団にあった。そうした不逞の輩を取り締まるべき警官が、犯罪経験者だったのだから、警察が泥棒を雇っていたようなものだった。彼ら「戦果アギヤー」は、検挙されるどころか、逆に沖縄全土に燎原の火の如き広がりを見せていったのも、ごく自然な成り行きだった。

本土復帰前の事件で特記されるのは、米軍犯罪の多さである。とりわけ女性に対する殺人、強姦などの犯罪は夥しい数にのぼった。仲村の前掲書によれば、一九四六（昭和二十）年から一九四九（昭和二十四）年の四年間で女性が被害者となった米軍犯罪中、明らかになったものだけでも、殺人二

二十三件、強姦二百九件、強姦未遂二百八十五件の多きを数えた。

これら米兵の凶悪犯罪を防ごうと、各集落の入り口に酸素ボンベが置かれ、侵入者があればこれを叩いて住民に知らせる防衛策がとられた。だが、そんな自衛策も所詮は螻蛄の斧だった。

「鉄の暴風」が吹き荒れた沖繩は、敗戦後は米兵の「性の暴風」にさらされた。

米兵の犯罪とは直接関係ないが、同書には占領軍兵との間に生まれた「混血児」の数も載っている。米兵による性犯罪と同様、他にはない貴重な統計資料なので紹介しておけば、敗戦後一九四九年まで約五年間における沖繩の「混血児」の数は、四百九十五人にも及んでいる。

沖繩の住民を恐怖のドン底に叩きこみ、それまで「醜い日本人」から沖繩を解放してくれた米軍に対し歓迎一辺倒ムードだった風潮を、一気に反米意識の流れに転じさせたのは、一九五五（昭和三十）年九月に起きた「由美子ちゃん事件」だった。乱暴されて殺害され、死体を嘉手納海岸近くのゴミ捨て場に遺棄された少女はまだ六歳の幼稚園児だった。まもなく米軍憲兵隊によって三十一歳の白人軍曹が逮捕され、軍法会議により殺人、強姦、誘拐の罪で死刑の判決を受けた。だが、犯人の米兵は、その後本国に強制送還され、四十五年の重労働に減刑された。

一九五九（昭和三十四）年には石川市（現・うるま市）の宮森小学校に米軍のジェット戦闘機が墜落し、死者十七人、重軽傷者二百十人を出す大惨事が起きた。この事故は、澎湃として盛り上がっていた「島ぐるみ反米闘争」に油を注いだ。

「由美子ちゃん事件」は、一九五五年九月に沖繩本島中部で起きた米兵三人による小学生少女レイプ事件を、米軍ジェット機墜落事故は、〇四年八月に宜野湾市の沖繩国際大学に墜落した米軍大型ヘリ

事故を、それぞれ容易に連想させる。沖縄の事件と事故は、本土復帰前も本土復帰後も、その本質を変えていない。

本土復帰後最も変わったのは、沖縄県警が再び日本政府の直轄機関となり、設備、人員など警備や捜査に関する陣容が、米軍占領時代よりはるかに整備向上したことである。

琉球警察時代を知るノンキャリアの沖縄県警OBたちが、過去を振り返って異口同音に語ったのは、人員や予算の少なさからくる警備力や捜査力の貧弱さだった。一九四七（昭和二十二）年に沖縄民警入りし、沖縄県警本部刑事部長などを歴任した太田利雄は言う。

「琉球警察時代は警備部がなくて、刑事部が事件だけでなく、公安関係もやっていました。捜査主任も本部に二人しかいない時代でした。選挙から暴力団、知能犯罪までひとりやらなければならなかった。復帰前の沖縄は完全に左翼の天下でした。毎日のように早期復帰請願のデモや座り込みが行われ、二万五千人のデモ隊が立法院前に押し寄せたこともありです。これに対して、当時の沖縄の警察力は全部合わせても約千名です。左翼勢力の方が警察よりずっと強かった時代があったんです」

デモ隊をゴボウ抜きにしようと思っても、逆に警官隊の方がデモ隊からゴボウ抜きにされ返される始末だった。米軍の横暴に不満を爆発させた一九七〇（昭和四十五）年十二月のコザ暴動でも、暴徒化した約二千人の群衆に、警察のピケットラインは楽々と突破されている。

太田が書いた『激動の警察回顧録』（私家版）のなかに、一九五四（昭和二十九）年十一月七日、待遇改善を求めて爆発した沖縄刑務所暴動事件にふれた箇所がある。当時、那覇市の中心部にあった沖縄刑務所には、「戦果アギヤー」など戦後の犯罪の激増により、収容定員の四倍以上の千人近い受刑者が収容されていた。

この事件を策動した首謀者の最初の計画では、指笛を合図に独房の破壊を開始し、全受刑者が外に出て刑務所を占拠した上、武器庫を破壊して武器を奪い、一部が琉球政府と新聞社に刑務所の待遇改善を求めて直訴するという、大規模な暴動計画が考えられていた。

だが、受刑者のなかに密告する者があり、刑務所側も事件発生に備えて非常態勢をとっていたため、そこまでの大事にはいたらなかった。とはいえ、沖縄本島全域から集めた六百余名の警察官を総動員してもなお、約五十名の脱獄者を出し、鎮圧まで五日間を要した。沖縄刑務所暴動事件は、沖縄の警察力の貧弱さをあらためて浮き彫りにした。

沖縄刑務所は一時、受刑者に完全占拠され、拳銃の威嚇発射もほとんど効果がなかった。太田は前掲書のなかで、受刑者側は説得にあたった自分に対し、火の燃え盛る火鉢を頭上へ浴びせようとした、と回顧している。事件後押収された武器類は、青龍刀五十九本、ノミ五本、鎌十二挺、短刀五振りなど多数に及んだ。立証はできなかったが、この暴動には、日本共産党と共闘関係にあった沖縄人民党の瀬長亀次郎がからんでいたといわれる。瀬長は当時、沖縄刑務所に収監中だった。

この暴動事件の主犯格の取り調べにあたった太田は、相手から逆に「十一月七日はどういう日か知っているか。ロシア革命の記念日だ」と言い返されたこと、前掲の『激動の警察回顧録』のなかで述懐している。

米軍の厚い壁と左翼の圧倒的勢力に苦心<sup>えん</sup>惨<sup>な</sup>憊しながら、それでも琉球警察時代は楽しかったと振り返る警察OBは少なくない。あるノンキャリアのプロパーはこう語る。

「米軍犯罪に対する捜査の壁はあまり感じなかった。米軍のMPと協力してよく捜査したが、刑事根性は日米とも同じだと思った。正直言って、今より昔の方がよかった。もし本土復帰していなければ、

オレだって県警本部長になれたかもしれないと思ったださあ〜」

そのプロパーはそう言つて笑つたが、まんざら冗談とも思えなかつた。

別のプロパーあがりの元刑事も、こういつて琉球警察時代を懐かしんだ。

「米軍のMPと一緒に捜査したとき、カービン銃をもたされて驚いたことがあります。ガサ入れのときも、挨拶などまったく抜きで、いきなり長靴でドアを蹴破るんです。映画の『アンタツチャブル』とまるつきり同じです。あれには正直感動しました」

戦前のガサ入れ捜査なら、沖縄口で丁寧「○○さん、おらんかねえ〜」と言いながら、ドアを叩いて所在確認し、やおら職務質問を始めていたのだから、このFBI並みの荒っぽい手口は、相当のカルチャーショックだったに違いない。

面白いのは、沖縄県警と敵対関係にある指定暴力団の幹部も、琉球警察時代の方がずっと「しのぎ」がやりやすかつた、と言つたことだつた。

「琉球警察時代は、事件が起きてからしか行動しませんでしたからね。ところが、沖縄県警になってから、上司のおぼえをめでたくするため、どんな些細な事件でもすぐしよっぱいて行くようになりました。でもはつきりした証拠がないから、たちまち保釈です。警察と飲み屋との癒着も目にあまります。われわれだと五千円かかる飲み代が、警察が行くと三分の一以下の千五百円で済みます」

別の組に所属する小指のない暴力団幹部も、沖縄県警と那覇一といわれる老舗料亭との癒着を口をきわめて罵つた。この幹部は人あたりもよく口調もやさしいが、那覇一の高級クラブのホステスの対応が悪かつたというだけで、若い衆を使ってバキュームカーで店に乗りつけ、糞尿を逆噴射したことがある、瞬間湯沸器タイプの武闘派である。

「あの料亭が売春をやっていることは誰でも知っている。ところが、警察は見て見ぬふりをしている。店から担当警官に相当のキックバックがあることは間違いない」

現在、沖縄の指定暴力団には、沖縄旭琉会と三代目旭琉会の二大組織がある。そのルーツにはそれぞれ、「那覇派」、「コザ派」、「山原派」、「普天間派」など沖縄の地名からとられた小派閥があり、それらが離合集散した結果が現在の組織となった過去をもっている。

沖縄県警の内部事情に詳しい琉球新報の記者によれば、沖縄独特の血族関係の強さを示す門中意識と地縁に根ざしたこうした派閥組織は、ヤクザだけでなく沖縄県警の内部にもあるという。

「沖縄県警には、宮古閥、久米島閥、それに旧コザ市（現・沖縄市）出身者を中心とした昭和会という三大派閥があります。昭和会は県警の刑事部を長年牛耳っており、数年前までは刑事部長か捜査一課長のどちらかは、必ず昭和会のメンバーでした」

ヤクザが飲んだ後には、必ず県警の刑事のボトルがキープされている。ヤクザとゴルフに行き「チャカ（拳銃）出せ」と、裏で話をつける県警の刑事部長がいた。ある元刑事は沖縄の大手パチンコチェーンのトップと親しく、その店には警察のガサが一度も入ったことがない、沖縄パチンコ業界の上部団体の会長を長くつとめていたのも戦前の県警の警官あがりだったので、パチンコ屋は県警OBの恰好の天下り先になっている……。

沖縄県警の話題が出る度、こうしたよからぬ噂が聞くとともに耳に入ってきた。沖縄の裏世界事情を仔細に教えてくれた情報関係者は、こんな耳を疑うようなことまで口走った。

「最近まで刑事部長だった男は現役時代、警察指定の葬儀屋からバックマージンをとっていた。警察は病院で死んだ人間以外の死体を全部解剖しますから、その情報を指定の葬儀屋に教えてやるかわり

に、裏金をとつていたわけです。その葬儀屋は死体の情報をくれるのは有り難いが、ちつとも儲けにならないとブーブー文句を言っていました。その刑事部長は裏でパチンコの景品交換の仕事もやっています。退職後は、現職時代のコネを生かした花屋と、遊技場と電気屋をやっています。あの刑事部長は悪徳警官の典型です」

沖繩は狭い島国である。容疑者を取り調べていたら、血のつながった遠い縁戚だったという話や、ヤクザになるかわりに警官になったという話が、まともに信じられる世界である。そんな一面があるからこそ、こうしたトンデモ話が次から次に飛び出してくるのだろう。この島では、近代と前近代がゴーヤチャンプルーのように矛盾なく混ざりあっている。

それにしても、沖繩は本当に人材の宝庫である。沖繩暗黒世界の最深部ディープまでガイドしてくれた情報関係者は、単に地獄耳のトップ屋的存在ではなく、尖閣諸島に本籍を移し、その証拠にと運転免許証を示してみせたゴリゴリの民族主義者でもある。

人材の多彩さは警察関係も変わらない。琉球新報の古参記者によれば、歴代沖繩県警本部長のなかには、仕事はほとんどしないくせに、キャリア風だけはぶいぶい吹かし、南国気分を思う存分満喫して本庁に帰っていった豪傑もいたという。

「仕事が終わると、宿舎に帰ってまずひとつ風呂浴び、リュウとしたラメ入りの背広に着替えてから、那覇一の高級飲み屋街の松山に出かける。靴は白いエナメルでキメている。長身でハンサムだから、そんな格好がよく似合う。店では、沖繩旭琉会と三代目旭琉会があてがったホステスの両手に花です。酔うとマイクを離さず、ゾクツとするような流し目でカラオケを歌いだす。へ清水うー、港の名物は

「お茶の香りいーと、男だあーてえー、という、ヤマトの『旅姿三人男』が持ち唄でした。それがはじまると、店の女の子がキャーキャー言っつていつもたいへんな騒ぎでした」

沖縄人たちが酒場でよくやる賭がある。沖縄の高校が甲子園で優勝するか、沖縄出身の総理大臣が出るか、沖縄県警本部長経験者の警視總監が誕生するか。このうち、どれが一番早く実現するかを当てる賭である。高校野球では春の大会ですでに優勝したので、残るは、総理大臣と警視總監のどちらが早く実現するかという事になった。

歴代沖縄県警本部長のなかで警視總監が一番近いところにいたと言われたのは、一九八六（昭和六十二年）八月から一九八八（昭和六十二年）一月まで同ポストにあった菅沼清高である。本庁からの信望篤かった菅沼の県警本部長在任期間は、昭和天皇の積年の悲願だった沖縄初訪問が予定されていた時期と重なっていた。警視庁公安二課長から沖縄県警本部長に抜擢された菅沼は、日本警察の威信と重責を一身に背負ったことになる。ところが、昭和天皇は菅沼の在任中から下血が始まり、この初の天皇訪沖計画は、結局実現することなく終わった。

菅沼はその後、警察庁公安一課長、警視庁警備部長、千葉県警本部長、警察庁警備局長、同官房長と着実に出世していった。警察庁の官房長は、警察庁長官、警視總監、警察庁次長に次ぐナンバー４のポストで、菅沼の次期警視總監は確実と見られていた。

ところが、九六年八月、菅沼は突然警察庁官房長のポストを辞して関西電力の顧問に就任し、周囲を驚かせた。次期警視總監人事をめぐる最高幹部会で意見調整がつかなかったからだといわれているが、真相は藪のなかである。前年三月には、オウム信者によるものと思われる国松孝次警察庁長官

狙撃事件が発生し、警察庁のトップ人事が混乱していたこともあり、その余波を被って貧乏クジを引いたのではないかとの見方も囁かれた。

その後、菅沼とは再就職先の大阪で会った。菅沼は沖縄県警本部長時代の思い出についてきわめてフランクに語ったが、話題が警視總監人事になると急に口が重くなった。ただ、菅沼の口ぶりからは、警察トップ人事とオウム事件の関係にはまだ話せない秘密があるように感じられた。

いづれにせよ、沖縄県警本部長経験者で警視總監まで登りつめた者はまだいない。菅沼に次ぐ沖縄県警出身の有名人は、竹花豊である。竹花は広島県警本部長時代、特攻服姿の少年たちと直接対決し、広島島の暴走族を壊滅状態に追い込んだことで知られている。沖縄県警捜査二課長時代は、沖縄の暴力団を徹底的に絞りあげた。

いま私の手元に、沖縄県警捜査二課に「暴力団対策室」が設置された一九七八（昭和五十三）年、当の二課長ポストにあった竹花が書いた「沖縄における暴力団の実態と取り締まり」と題するレポート（捜査研究・臨時増刊号／特集・暴力団犯罪）所収）がある。

文章は書き出しからおどろおどろしく、書いた本人こそヤクザ映画の見すぎで、安っぽいヒロイズムに酔っているだけではないかとの感想を抱かせる。ひどく肩に力が入ったためったにお目にかかれない力作なので、冒頭部分だけでも紹介しておこう。

〈沖縄の暴力団の歴史は、鮮血に彩られた対立抗争の歴史である。（中略）それは残虐さと陰湿感だけを残す安物アクション劇を何度も見せられた後の暗い後味を想起させる。黒い私利だけを追い求めて、人の生命や安全を踏みにじつてきた彼らの無法ぶりには、三分の同情やあわれみも持つ

余地がない)

竹花は○三年六月、石原慎太郎に引き抜かれ、都の副知事に就任したことで、時の人となった。竹花は持ち前の「目明かし根性」を發揮し、新宿歌舞伎町のホストクラブの看板を強制的に撤去し、ヌード雑誌を片っ端から摘発するなどの「浄化作戦」に乗り出して、竹花以上の小児病的タカ派体質をもつ上司・慎太郎のおぼえめでたかった。

だが、同じ副知事で「暴れん坊副將軍」の異名で知られる浜渦武生（まづ）の都庁人事壟断問題（もろだ）に連座責任をとらされる形で、○五年五月副知事ポストの座から追われた。

沖縄県警OBは、国松警察庁長官や石原都知事までまきこんでまことに多士（たし）濟々（ざいざい）である。

○二年八月から○四年八月まで県警本部長のポストにあつた高橋清孝（その後、警察庁警備課長、北海道警本部長を経て、○八年九月現在警視庁警備部長）は、戦後十八人を数える歴代沖縄県警本部長中、好感度で群を抜いている。記者たちから聞こえてくる評判も「外見はさわやかだが、やるときはやる」「官僚臭のいやみがない」「案外、親分肌なので部下はやりやすい」といった上々のものばかりだった。

その高橋に県警本部で一時間以上インタビューし、その後、国際通り裏の居酒屋で沖縄料理をつつきながら泡盛を酌み交わす雑談をして、評判通りの好印象をもった。

高橋は、山梨県上九一色村の第六サティアンの天井裏に隠れていたオウム真理教グルの麻原彰晃が逮捕されたとき、警視庁の広報課長だった。逮捕時、警察車両に乗せられた麻原の髭もじやの顔と紫

の法衣が一瞬テレビ画面に映ったのは、高橋のとっさの機転の賜物だった。

上九一色村は当日、濃霧につつまれていた。そのままの状態では、麻原の登場を待ち構える報道陣に、決定的瞬間を撮らせることができない。高橋は麻原の搬出をしばらく待機させ、濃霧が一瞬晴れたスキについて発車を命じた。こうして麻原の悪相といかがわしい雰囲気、マスコミを通じて満天下にさらされることになった。

「家を出がけにカミさんから、あんなに悪いヤツはいない、逮捕の様子を見せるべきだ、とさんざん言われた。それが、心のどこかにひっかかっていたのかもしれない」

そんな秘話めいたエピソードを雑談のなかでさりげなく話してくれたことでもわかるように、高橋の本番インタビューの受け答えも、きわめて率直だった。その言葉には、沖繩がおかれた特殊な状況とそれゆえの捜査のむづかしさが、間然するところなく語られていた。

——沖繩県警は二度目の赴任ということになるそうですね。

「ええ、九〇年の四月から翌年の八月まで、警務部長の立場で赴任しました」

——沖繩のヤクザ抗争が一番激しかった時期ですね。

「第五次抗争のときです。着任した年の十一月二十三日に警官二人が射殺された」

——沖繩旭琉会と三代目旭琉会の抗争で、三代目旭琉会の又吉カマー（まじ）が発砲した。犯人のカマーはままだ捕まっていますか。

「もう死んでいるかもしれませんが、骨は絶対にあげたい。沖繩県警の最大の不祥事は警察官二名の殉職だと思っていますから」

——沖繩旭琉会と三代目旭琉会は絶対に壊滅すると。

「ええ、私の気持ちのなかでは第六次抗争はまだ続いています。警官二人が射殺された十一月二十三日の命日までには何とかしたい。捜査会議でも必ず『仲間殺されて、そのまんまか!』と言うんです」  
——ところで、沖縄県警の現在の人員は二千四百五十名態勢だということですが、この陣容で満足していますか？

「沖縄は多くの離島をかかえています。負担人口はやはりちょっと重い気がします。それに米軍の存在もある。軍属、家族まで含めると、五万人いるんです。もう一つ挙げれば、年間五百万人の観光客を狙った犯罪の問題もあります」

——この陣容では、やはり負担は重いと。

「上を見ればキリがないでしょうが、正直、そう思います。離島と米軍と観光客をかかえた上に、国境県という特殊事情もあります。麻薬・覚醒剤の中継基地になったり。それに政治的にむづかしい尖閣の問題もあります」

——そこが他の都道府県とはまったく違う沖縄県警の特殊性です。政治・外交・防衛マターを直接かかえている以上、官邸とはいつも密接に連絡をとっている？

「それはありません。あくまで本庁（警察庁）が窓口です」

——沖縄県警と官邸を直接結ぶホットラインはない？

「いや、ないですよ、ないですよ（笑）」

——ところで沖縄の犯罪に特徴はありますか？

「あまり言いたくないんですが（笑）、殺人が多いんです。十万人あたりの殺人事件発生率では全国一です。それと暴行や傷害などの粗暴犯が多い。全国平均の二倍近くあります。飲酒運転も日本一

(笑)

沖縄の殺人事件の発生率が飛び抜けて高いのは、おそらく一つには地縁、血縁の濃さに由来している。

沖縄を語るとき、必ず引き合いに出される「イチヤリバー、チヨーデー（一度知り合ったら兄弟同然）」という言葉や、相互扶助精神を表す「ユイマール」といった濃密な関係は、ひとたび決裂すると、たちまちすさまじい殺意に転化する。安室奈美恵の母親も、義弟に車で何度も轢かれた上、最後はナタをふるって惨殺された。

沖縄には離島を含め、八十四カ所の駐在所がある。高橋は最後に「在任中、そのすべてを廻りたい」と言った。

高橋は沖縄県警本部長を異動する直前、二つの大事件に遭遇している。一つは〇四年三月の中国人活動家による尖閣諸島不法上陸事件、もう一つは同年八月の米軍ヘリコプター墜落事件である。

高橋は私とのインタビューで、米軍の捜査機関との連携は非常にうまくいっている、と語ったが、米軍の大型ヘリコプターが沖縄国際大学に墜落したときには、米軍側に現場検証を強く要求しながら、それをあつげなく拒否されている。

この事故では放射能漏れも起きている。事故現場に急行して沖縄県警の立ち入りを封鎖した米軍兵士のなかに黄色い防護服を着た兵士がいることから、ストロンチウム90が飛散した可能性のあることが発覚した。米軍の当初の発表では放射能は少ないとのことだったが、その後、一秒間に出す放射能量は劣化ウランの一億五千倍もあり、発ガン性もあるらしいことが判明した。これほどの重大事故だったにもかかわらず、沖縄県警は米軍に阻止され立ち入ることさえできなかった。

尖閣事件では、上陸した中国人活動家を現行犯逮捕して送検する強硬方針を立てながら、日中関係の悪化を懸念した政府判断によって、急遽全員が強制送還されている。現場捜査の最高責任者の高橋からすれば、どちらの事件も断腸の思いで捜査を諦めたに違いない。

高橋は県警本部長の離任会見で、米軍ヘリ墜落事件にふれ「県民感情は理解できるが、日米地位協定に縛られる面もあり、それを越えて捜査をやるわけにいかない」と語ったが、正直、そう言うのが精一杯のところだったろう。

尖閣上陸事件で政府判断が下ったときも、衝撃が走った。ある警察担当記者によれば、県警内部にやり場のない憤りと徒労感が広がっていくのがはつきりわかったという。

政府は〇四年十月、米軍ヘリ墜落事故を教訓化し、米軍との間の迅速な対応や関係省庁との円滑な連絡を図る目的で、危機管理官という新しい役職を設け、警察庁からキャリア官僚を沖縄に送り込んだ。警察庁は沖縄に対し、沖縄県警と危機管理官という二頭立ての布陣を敷いたことになる。

それは、沖縄県警だけでは在沖米軍の不祥事に際し力不足と、中央から烙印を押された構図に見えなくもない。戦後ヤマト世の沖縄警察は、基地や国境といった厄介な問題を押しつけられたばかりか、本土の身勝手な政治判断にふりまわされつづけている。

それは逆にいえば、戦後ヤマトはこの島のかつての宗主国の中米両国の顔色を右顧左眄するだけで、「物呉れる主人」としての責務をいまだきちんと果たしていない証拠ともいえる。

そんな無責任で不安定な時代以前のアメリカ世に呱呱の声をあげ、そこをルートとして日米二世を遅く生き抜いた沖縄ヤクザの歴史は、次の「沖縄アンダーグラウンド」で紹介することにする。

## スパイスパイく島

沖繩を予備取材する段階で、この島を何度も訪ねたことがある知り合いの沖繩耽溺者マヤロウヤンキから、こう注意された。

「佐野ちゃん、沖繩の酒場ではあまり大声で話さない方がいいぞ。どんなところにもC I CやC I Dのスパイがいて、話した内容が翌日にはもう筒抜けになって米軍に伝わっている。米軍の情報網は沖繩全土に張りめぐらされていると思った方がいいよ」

C I Cとは、Counter Intelligence Corps（米軍対防諜部隊）の略称、C I Dとは、Criminal Investigation Detachment（米軍犯罪特捜隊）の略称である。

那覇・国際通り裏の安酒場の薄暗いカウンターの片隅で、硬派のジャーナリストとして知られる彼は、誰も知らない沖繩のトップシークレットを初めて打ち明けでもするように、おごそかな口調で言った。

話の内容の割に、そう耳元で囁いたつもりの声が、店の誰にも聞こえるほど大きかったのが、ご愛嬌だった。ふだん人の悪口と笑えないオヤジギャグばかり飛ばしている彼の顔つきが、いつになく真剣なのが、よけいに滑稽だった。

「おやおや、学生時代反日共の活動家として鳴らしたあんたまで沖繩に来ると、民青なみの謀略史観

の持ち主になるとはな。それじゃまるで、諸悪の根源は米帝にあると言いつづけた松本清張か吉原公一郎みたいじゃないか」

それから数日後、国際通りの古本屋で『封印の公安警察―あなたのそばにスパイがいる』（沖繩教育図書）という、ものものしいタイトルの本を見つけた。

それを早速買ったのは、沖繩Ⅱ謀略列島という見方は時代錯誤とまぜつかえしはしたものの、聞いたばかりの沖繩はスパイだらけという言葉に、なぜかひっかかっていたためだった。「あなたのそばにスパイがいる」という副題は、彼が言ったことをそのまま指しているようだった。著者は島袋修といい、肩書きは元沖繩県警警部補とある。

島袋は一九五一（昭和二十六）年、八重山諸島の鳩間島トビマに生まれた。鳩間島は、緒方拳が出演したテレビドラマ「瑠璃の島」（〇四年放映）のロケ地として評判になった、石垣島の西方二十五キロに浮かぶ人口五十人あまりの小さな島である。

島袋が拓殖大学商学部を卒業後、沖繩県警に奉職したのは、沖繩の本土復帰から二年後の一九七四（昭和四十九）年のことだった。島袋はコザ署（現・沖繩署）勤務を経て、沖繩県警本部警備部警備課調査一係に配属された。その任務について、島袋は前掲書でこう述べている。

（私に課せられた任務は、沖繩での共産党の活動状況やその下部組織である民青同（民主青年同盟）の動きを逐一チェックすることであった（中略）。私たち作業員は、日本共産党は社会を攪乱する暴力的破壊活動集団であると徹底的に洗脳されていた。共産党との対決姿勢を怠らず、その組織解

明のため党中枢の人間に近づき、スパイとして育成するというのが、われわれに課せられた使命であった。

島袋は「赤旗」配達員の高校生に言葉巧みに近づき、みごと公安警察のスパイA-6に仕立てあげた。

（私の公安警備警察官としての最大の仕事は、昭和五十六年、那覇市泊港近くの前島二丁目のビル  
の三階にあった民青同盟県委員会の事務所に不法侵入し、内部資料を大量に持ち出したことであつた。（中略）その民青同の事務所に、私はA-6の手引きで侵入した。彼が一人で事務所に着直している夜を狙ったのである。そして内部資料を持ち出して全部コピーし、共産党の中央からの指示情報などを収集した。これは大変な戦果であつた）

島袋はこの功により、警察庁から推薦を受け、沖縄からただ一人東京・中野にある警察大学校の「警備専科教養講習」、彼が言うところの現代版中野学校スパイ養成講座の受講を許された。

ここで尾行、張り込み、隠し撮りなどのスパイ技術を徹底的にたたきこまれた島袋は、津野純次という変名を名乗り、あらゆるスパイ活動を行って日本共産党の破壊工作に没頭した。なかにはこんな三流スパイ映画もどきのエピソードも紹介されている。

（共産党シンパである中堅企業の幹部社員とは桜坂の酒場で知り合った。これも事前に徹底的に基

礎調査し、尾行し、ある程度の成功率は予想していたが、それでもなかなか相手が落ちないため、ある夜、私のおごりで彼を酔わせ、当時那覇市でナンバーワンの盛り場だった桜坂のストリップ劇場に誘いこんだ。

この劇場では本番ショーも演じており、金のない若い黒人兵や自衛隊員などが無料のマネ板ショーのステージに上がり、性の捌け口としていた。私も彼を酔わせ、「おい、沖縄男子の面子にかけても彼女を泣かせてこい。君は巨根の持主だと聞いたぞ」とおだてて、彼を舞台にあげて本番ショーをさせた。そしてすかさず、生々しい証拠写真をカメラで隠し撮りし、後日、その写真を見せてなかば脅迫めいたかたちで彼をひきずり、スパイ要員に仕立てあげたのである。

この本はなかなか刺激的だった。だが、惜しむらくは、そこに書かれていることが、共産党をはじめとする沖縄県警の対左翼諜報活動に限定されていることである。ここにはCICやCIDなど米軍の対日スパイ活動の内情には、一切ふれられていない。

知っていても本には書けないこともあったのではないか。そう思い、伝をたどって島袋に会った。島袋は一九八四（昭和五十九）年、警部補で沖縄県警を退職した。その後、興信所、芸能プロダクション、骨董品店経営などを経て、現在は沖縄本島中部の読谷村でスナックを営んでいる。薄暗いスナックで会った島袋の名刺には、「MSPプロダクション 弾き語り」と書かれていた。

——「MSPプロダクション」って沖縄のタレントを抱えているんですか。

「いえ、タレントなんてとんでもない」

——じゃ、自分ひとり？

「そうそう」

——名刺に弾き語りとありますが、仕事のオフアールはあるんですか？

「ありませんね（笑）」

——ない。じゃ、生活はなかなか大変じゃないですか。

「ええ、もう何でも屋です」

——島袋さんは対左翼の公安警察官だったわけですが、米軍のC I CやC I Dに知り合いはいませんか。

「二世、三世の人たちですね。基地反対のデモがあると、確かにそういう人たちが必ず来とつたですよ。彼らとは裏で飲み会をやりながら情報交換したこともあります」

——連絡はとれませんか。

「名刺が見つかったら、連絡します」

——頼みます。あの本には沖繩県警のダークサイド部分も随分書かれていますね。

「私の上司なんかでも表帳簿と別に裏帳簿をもっていましたからね」

——それを使って飲み歩いたり、カラ出張したりする。

「大変な裏金です。警備部長や調査部長、補佐官ら二十数名が飲み歩いて一晩で三十万円つてこともあった。カラ領収書で三十万円ピンハネしたこともありました」

——日共以外にどんな左翼組織を内偵したんですか。

「革マル、中核、第四インター、革労協、沖繩解放同盟。極左勢力すべてです。そのときの資料は探せばあると思いますので、見つかったら送ります」

——助かります。ところで革マル派の拠点校は琉大だったんですか。

「それと沖繩国際大学が革マルでした。中核の拠点校は沖大」

——マスコミにも随分左翼勢力が入っていた。

「沖繩タイムスは民青、琉球新報は革マルと中核でした。私はどの記者がどんなセクトに入っているか全部つかんでいましたので、あの記者が来たら注意しろよって、警察のみんなに教えていました」

島袋は前掲書のなかで、自分が公安警察のスパイに仕立てあげた「赤旗」の元配達員A―6が、日共と警察の板挟みになって首吊り自殺したときの衝撃を記している。

〈彼の人生を狂わせたのは私であり、公安警察という化物である。私は罪の意識に苛まれて、錯乱状態に陥った〉

このとき島袋は読谷村の突端の残波岬から投身自殺を企てている。

公安警察官を辞めて二十年以上もたつというのに、島袋の私生活にはいまでもそれを引きずった荒れた様子が見てとれた。それは人の弱みにつけこんでスパイ行為を強いてきた公安警察官がたどる必然的宿命のようにも思えた。

後日、島袋から小包が届いた。なかには、インタビュー時に約束した極左関係の資料綴りが入っていた。

ガリ版刷り五十数ページの小冊子の表紙の上部には、「秘（無期限）」という赤い判子が押されている。表題は「当面の極左情勢について」である。対象となっているのは、中核派、革マル派、第四イ

ンター日本支部、革労協、游撃派、蜂起派、全国委員会派（烽火派）、共労党（プロ青同）の八つである。

それはそれで興味深かった。だが、残念ながら私が探していたC I CやC I D関係者の連絡先は書かれていなかった。

その後、沖縄県警O Bに会う度、C I CやC I D関係者について尋ねたが、彼らの詳しい消息を知る者はいなかった。その取材の過程で、沖縄初の婦人警官として採用された女性に会うことができたのが、収穫といえれば収穫だった。

彼女は新垣悦子といい、国際通りの路地裏で琉球舞踊衣装の店「てんぐ屋」を経営している。○六年現在七十五歳になっていたが、健康そうな小太りの体と愛嬌のある笑顔からは、とてもその年齢は想像できなかった。

新垣は狭い店内で昼食中だったが、弁当を食べる箸を休めて快く取材に応じてくれた。

——婦人警官になったのは何年頃ですか。

「昭和二十四年から二十五年頃だったと思います。はじめはコザ署の事務員だったんです。本当は基地の軍作業をやりたいかかったんですが、父がどうしても許してくれなくて。それでお隣に住んでいた警察官の紹介で、コザ署に書記として勤めはじめたんです」

——警察官になつたきつかけは。

「ちょうどその頃、婦人警官第一号の募集があったんです」

——婦人警官第一号は全員で何名いたんですか。

「三十三名でした」

——まだ琉球警察の時代ですね。

「ええ、そうです。カーキ色のハロー帽をかぶってね」

——嫌な思い出はありませんか。

「軍で働いている女性の身体検査をするときは嫌だったですね。女性の身体検査は男の人にできないから、米軍に命じられて私たち婦人警官がやっただけです。同じ沖縄人にやるわけです。まわりは全部外人が見張っている。あれは同じ沖縄の女として嫌だったですね。特にあの頃は何でも欲しい時代ですからね」

——米軍基地からものをくすねる「戦果アギヤー」が横行した時代ですね。

「ええ、それがわかっていたから、基地の身体検査だけは本当に嫌だったですね」

彼女はむろんCICやCIDではない。しかし、米軍の命令で「戦果アギヤー」を取り締まったという意味を広義に解釈するなら、彼女もまた意図に反して米軍の協力者にさせられたという見方ができないこともない。

CICやCIDの対日諜報活動に携わった関係者の身元は、ひょんなことから割れた。情報をもたせられてきたのは奥茂治という男である。奄美大島生まれの奥は、政財界から暴力団、右翼団体まで、沖縄のアングラ世界に驚くほど通じた人物である。

○一年、防衛庁の機密システムを漏洩したとしてそれを作成した富士通から犯人扱いされた奥は、海上自衛隊出身で沖縄隊友会の副会長をつとめる。いま海底油田をめぐる中国との間で国際的紛争の火種となっている尖閣諸島に本籍を移した生粋まろこの民族派でもある。

CIDの話題が出たのは、沖縄における奄美出身者のコミュニティの強さについて雑談中のときだった。

「沖縄市に奄美出身の酒井平八郎という男がいます。彼は戦後間もなくCIDの活動を手伝っていました。酒井はその後、沖縄市の近くの北中城村（北なかぎ）に亜細亜興業という会社を設立して、東京トルコという、いまでいうソーブランドをはじめたんです。ソーブランド嬢は、売春で摘発された東京のトルコ嬢をみんなこっちに連れてきた」

——むちゃくちゃ面白い。そのトルコ風呂はいつ頃できたんですか。

「復帰前です。そのトルコには沖縄県警のOBも多数からんでいます」

——ますますすごい話になってきた。そのトルコ風呂の目的は何だったんですか。

「米軍の動向を探るためです。外事課の連中が中心でした。指揮したのは田中勇吉という警察関係の黒幕です。田中は東京から月に一度くらい沖縄に来ていた」

対日諜報活動に携わったCIDの関係者が、沖縄の本土復帰を目前に沖縄県警OBや警察関係の黒幕らとはからって、今度は逆にトルコ風呂を使って米軍の動向を探り出す。まさに謀略列島そのものではないか。

——そのトルコはいつ頃まであったんですか。

「いまでもありますよ」

——えっ！

「（おの）宜野湾市から沖縄市に向かう国道三三〇号線の右側です。ヒルトンホテルに向かう道をあがって行く途中にあります」

——いまでも東京トルコという名前なんですか。

「それはわかりません。経営者が当時とはかわっていますからね。当時の店には地下室があつて、そこが情報分析室になつていた」

まるで沖繩版の「007」か「ミッシェン・インポッシブル」シリーズのような話である。私は奥から聞いた元CIDの酒井平八郎に会う前に、とりあえず東京トルコを經營していた亜細亜興業の法人登記をとつてみた。

商号 亜細亜興業株式会社

本店 沖繩県中頭郡北中城村字屋宜原五二一番地

会社設立の年月日 昭和四十五年五月二十三日

目的 ① 観光業 ② ホテル ③ レストラン ④ レジャーセンター / 2 スチームバスの經營 / 3  
前各号に附帯する一切の業務

旧役員陣を過去に遡つてとつてみると、奥が名前を挙げた「警察関係の黒幕」の田中勇吉や、「元CID」の酒井平八郎、さらには監査役として伊佐義一という男が名前を連ねていた。伊佐は沖繩県警のOBで元那覇署長という大物である。

その店は後で取材することにして、亜細亜興業の代表取締役もつとめたことがある沖繩市在住の酒井平八郎をまず訪ねた。米軍のハウスを改造したという洋風の自宅で会った酒井は、質問が質問だけに最初警戒されると思つたが、受け答えは思ひのほか率直だった。

「僕の名前を誰から聞きました？ ああ、奥ですか。でも僕はCIDじゃありません。僕は元々満鉄の職員だったんです。奄美大島に引き揚げてきた後、奄美の軍政府で働き、マーティンというサージエントに可愛がられた。そのマーティンから、今度沖繩に移るからついてこいと言われて沖繩に移住してきた。僕が米軍とあんまりべつたりの関係だったので、きっと奥はそれをCIDと勘違いしたんでしょう。ちょうどよかった。この近くにCIDで働いていた人がいますから、何だったらここに呼びましょうか」

酒井はそう言つて、七十代の男を自宅に呼んだ。比嘉寛幸と名乗る人物は、ラフな服装から想像した通り、初対面にもかかわらず、私の質問にフランクに答えてくれた。比嘉がCIDの仕事に就いたのは一九五一（昭和二十六）年のことだという。

——まずCIDとCIDの違いを説明してもらえませんか。

「CIDは思想調査が専門です。私らCIDは一般的な犯罪捜査が主な仕事でした。CIDはほとんど日系アメリカ二世でしたが、CIDは全部日本人でした」

——CIDではどんな犯罪捜査が多かったですか。

「当時は軍需品の窃盗です。トラックを持ち出してガソリンを抜き取ったり」

——なるほど。戦果アギヤーですね。それに対してCIDの思想調査は、具体的にはどう行われたんですか。

「選挙演説会場に潜りこんで、誰がどんなことを喋ったかを上に報告するんです」

——当然、支援者の思想傾向も内偵するんでしょうね。

「ええ、革新候補の演説会に集まったメンバーについては、どこの青年会やどの団体に所属している

かなどを一年に一回全部チェックしていました」

——C I Dは沖縄復帰まではずっとあったんですか。

「いや、C I Dに関する限り、つい最近まであったと思いますよ」

——えっ、そうなんですか。C I Dと沖縄県警の関係はどうだったんですか。

「当時、軍は軍、民は民という捜査管轄権というのがありましたが、合同捜査というのを時々行っておりまして。どこそこの基地に警察官を何名ほど送るからよろしくという情報交換をやってまして、結構うまくいってましたよ」

——C I Dは捜査するとき拳銃などの武器は携行できたんですか。

「これは話していいかどうかわかりませんが、まあC I Dを統括していた米軍の憲兵司令官としては、仕事柄必要な場合があるということで、張り込みなんかのときには、許可証明書を発行した上で武器携行を許していましたね」

比嘉との話がひとまず終わったので、質問の矛先を酒井に向けた。酒井は自分はC I Dとは無関係だと言ったが、警察や米軍関係者と強いコネクションをもっていたことから見ても、C I DないしC I Cの周辺にいたことは間違いなさそうだった。

酒井はトルコ風呂の社長になったかと思えば、一旗揚げることを企てて南米のポリヴィアやパラグアイに移住したものの、失敗して帰ってきたりという、よくわけのわからない人物だった。ただし、こうした経歴から連想されがちな怪人物というわけではなく、案外、人に頼まれるといやとは言えない性格の好人物のようだった。

——酒井さんは、北中城村の屋宜原にあった東京トルコの社長をやってましたね。

「嫌だな。何でも知っている（笑）。ええ、雇われ社長をね」

——酒井さんを雇われ社長にした田中勇吉さんはどんな人ですか。警視庁の外事課出身ですか。

「いや、外事課というより、暴力団とか右翼関係の情報がとれる警視庁の『便利屋さん』だったんじゃないですか」

——なるほど、『便利屋』ですか。東京トルコは外人専用だったんですか。

「まあ、外人が多かったですね」

——それじゃ、料金も結構高い。

「そうです、高級です。内地から送られてきた女の子もみんな英語ができた」

——相当、はやったそうですね。

「すごかったですよ。特にベトナム戦争当時はね。外人の独占状態で日本人は入れなかった。C I Cの連中もよく遊びに来ていた」

——那覇署のO Bの伊佐義一さんは監査役でしたね。

「彼は東京トルコの株を持っていたんじゃないかな。（やはり那覇署長だった）長嶺紀一（故人）も株を持っていて、しょっちゅう飲みに来ていた。東京トルコには僕がつくったカラオケルームがあって、米軍関係者の溜まり場になっていた。あそこに来れば米軍の情報がとれました」

後で伊佐義一に、彼が取締役相談役をつとめる宜野湾市の全島警備保障の事務所で会って確認をとると、東京トルコをつくった田中勇吉や酒井平八郎とはいまでも親交があることを認めた。

伊佐は映画「L・A・コンフィデンシャル」に悪徳刑事役で出たジェームズ・クロムウェル似の苦み走ったいい男である。その不敵な面構えは、この謎めいた諜報コネクションに登場するキャラクター

ーとして、いかにもふさわしかった。

伊佐は沖縄県警を退職した一九八〇（昭和五十五）年、那覇市松山に伊佐義一調査事務所という探偵社をつくった。その法人登記をとると、監査役に武藤三男という人物の名があった。

武藤は、一九六八（昭和四十三）年十二月十日に発生した三億円事件の総指揮をとった警視庁の元捜査一課長である。

武藤は警視庁を退職した一九七五（昭和五十）年、東京都台東区根岸に武藤三男調査事務所という探偵社を設立した。田中勇吉も創立メンバーの一人だった。武藤三男調査事務所はその後、エム・アイ・エスと改称され、現在は田中勇吉が同社の代表となっている。

酒井平八郎の自宅を辞去したあと、北中城村屋宜原の元東京トルコに行ってみた。その店は国道三三〇号線から狭い山裾の道を入った一番奥まったところにあった。店の看板は「ウインデイ」と書き換えられていた。昼間から車がひっきりなしに入ってくる。かなり繁盛している店のようだった。

店から連絡を受けておっとり刀でやってきたパンチパーマの雇われ支配人の人相風体から推察すると、「ウインデイ」の現在の経営者は稼業関係者のようだった。

店の様子を一通り見た後、酒井平八郎から聞いた近くに住む元東京トルコ女性従業員の家を訪ねた。彼女は伊佐洋子といい、亜細亜興業の代表取締役だった時期もある。

「私があそこに勤めたのは、昭和五十四年頃です。約十年間勤めました。偶然近所の方が掃除婦をしていて、その人の紹介でフロントをやるようになったんです」

——田中勇吉さんはよく来ていましたか。

「月に一度くらい集金に来ていました。平成元年に経営者はかわりました。新しい経営者は稼業関係の人？ いえ、水道工事屋さんだそうです。他に本当の経営者がいて、雇われだとも聞いていますか」

——給料はよかったですか。

「ええ、よかったですね。月に二十四万円くらいもらってましたから」

伊佐洋子が住む自宅は、元東京トルコの反対側の山腹に立つ三階建ての豪邸である。その豊かな暮らし向きからも、彼女が勤めていた東京トルコの繁盛ぶりがよくわかった。

沖縄から東京に戻って最初にやらなければならないことは、東京トルコをつくったエム・アイ・エス代表取締役の田中勇吉に会うことだった。

JR浅草橋駅近くの事務所で会った田中は、〇六年現在八十一歳になる。田中は想像していた男とはまったく違って、口八丁手八丁を絵にしたような快活な男だった。だが、肝心なところになると何も喋らなくなるなかなかの曲者まがめだった。

「えっ、酒井平八郎にも伊佐義一にも伊佐洋子にも会ってきたの。あはははは。それじゃ、みんなわかってるんじゃない。僕が言うことは何もないじゃない」

——いや、そういうわけにはいきません（笑）。ズバリ聞きます。なぜ、返還前の沖縄にトルコ風呂をつくったんですか。酒井さんは米軍の情報を集めるためだと言っていましたか。もう歴史だから、正直に話されてもいいんじゃないですか。

「うん、確かに歴史だけど、まだ喋れないこともあるからね」

——田中さんは警視庁の外事課に関係していたんですか。

「それはあなたの想像にお任せしますよ」

——東京トルコでとった米軍情報は警視庁にあげていたんですか。

「いや、あげません」

——じゃ、どこにあげていたんですか。

「あるところ」

——警察庁ですか？

「まあ、そっちはいくらかね」

——外務省とか防衛庁にもあげていたんですか。

「いやあ、まあ、どうだかな、それは（笑）」

——まあ、そのあたりですね。

「うん」

田中が断片的に語った東京トルコ設立の経緯を整理すると、以下のようになる。

最初、米軍の情報収集の拠点は、小笠原の父島につくる計画だった。だが土地買収ができず、失敗に終わった。それを浅草署の署長で宮古島出身の狩俣恵長（かまけいさぶろ）という田中と親しい公安出身の男に話すと、「田中さん、それじゃ沖繩につくれよ」ということになった。

——そこでどんな情報を集めたんですか。

「韓国に駐留する米軍関係者は、みんな沖繩に来るんです。その情報がとれるってことなんです。その線から中国や台湾の情報もとれる。まあ、あんまりこんな話しちゃあまずいんだけどね」

——ざっくり言って、そういう話ですか。

「うん、ざっくり言ってね。詳しい中身は言えないけどね」

田中は最後まで尻尾を出さなかった。後日、田中と一緒に調査事務所をはじめた元警視庁捜査一課長の武藤三男に会って尋ねても、田中の正体は最後までわからなかった。

東京トルコをはじめるにあたって田中の片腕となったのは、亜細亜興業の代表もつとめたことがある菅原宮子という女性である。田中によれば、菅原は調査事務所設立当時から職員で、元々は中村扇雀（その後、中村雁治郎を経て現・四代目坂田藤十郎）が銀座でやっていたクラブのホステスだったという。

「彼女は英語もなかなか達者でね。それでこれは使えると思って銀座のクラブから引っこ抜いて、マネージャーの勉強をさせるため、東京・吉原のトルコ風呂の經理の仕事に送り込んだ」

登記簿に記載された彼女の住所は、東京都台東区谷中七丁目×番の×である。彼女に会いたいと思ひ、そこを訪ねると、谷中墓地に隣接した木造アパートだった。

墓地の敷地内といってもいい周辺の環境といい、化屋敷敷然としたアパートの老朽ぶりといい、その薄気味悪い雰囲気は、米軍の情報をとるため、沖縄のトルコ風呂に送り込まれた女スパイが棲息するには、いかにもふさわしいたはずまだった。だが、そのアパートの大家の話では、菅原はかなり以前に引越して、いまはここにいないという。

「彼女と沖縄の関係ですか？　そういえば、うちの子どもが『シーサーアンドギー』っていう沖縄のお菓子を土産にもらったことがあるそうです」

大家が沖繩の魔除けの獅子像のシーサーと、沖繩の代表的揚げ菓子のサーターアンダギーを一緒にたにして「シーサーアンダギー」と言ったのには、笑った。

大家は、菅原の消息は彼女が昔住んでいた部屋に現在住んでいるお婆さんに聞けばわかるかもしれない、と言った。そこで彼女の帰るのを待つて話を聞いた。

「菅原さんねえ。もう大昔の話よ。生きていても九十歳くらいになるんじゃないかしら。沖繩ねえ。沖繩っていえば、池田大作先生は『沖繩には幸せになってほしい』といつも仰おほっているのよ。私がこの年で働けるのも創価学会のおかげよ。

このアパートの大家も昔は熱心な学会員だったからよかつたんだけど、いまは全然ダメね。(突然声をひそめて)あの息子は共産黨員なのよ。死んだお母さんはちゃんとした人だったのね。創価学会は、そりゃあもうご利益りやくがすごくてね……」

老婆はそう言うのと、創価学会と池田大作の大絶賛大会をはじめた。私は胸の内むねでやれやれと呟つぶやきながら、ここでまた振り出しに戻って共産党を蛇蝎へちまの如く嫌う見方に出会ったことも、創価学会の常套文句ではないが、それこそ何かの因縁だなと思うことにした。

その後の調べで、菅原宮子が千葉市稲毛区に住んでいることがわかった。JRの稲毛駅から車で二十分ほど行ったそこを訪ね、「菅原さん」と大声で来意を告げると、中から人の気配がし、しわぶきらしきものも聞こえた。だが、なぜかいつまでたっても返事はなかった。

返還前の沖繩のトルコ風呂に送り込まれ、米軍情報をとることを任務とした菅原宮子の数奇な人生には、書かれざる沖繩戦後史の貴重な一ページが刻まれているはずである。

この年老いた元女スパイはその秘密を誰にも明かさぬまま、諜報員の掟を頑に守って、ひとりひっそりと彼岸に渡ろうとしているのだろうか。

何度か声をかけるうち、室内から着物をひきずるような衣擦れの音が聞こえた。しかし、やはり応答はなかった。

その微かな物音は、老婆が大蛇にでも変身して座敷を這いずり回る姿を妄想させた。そのあらぬ妄想に、日米のスパイたちがひそむ蛇のように細長い沖繩の地図の連想が重なった。

日本とアメリカは、それぞれ見えない地下茎で沖繩列島と繋がりにあっている。私はこの取材で出会った沖繩と本土の謎めいた男たちを思い出し、首筋のあたりにうそ寒いものを感じた。

## 米軍現金輸送車強盗事件

沖縄県警の特色の一つは、退職した幹部たちが、在職中に担当した事件の回顧録をコンスタントに発表していることである。県警OBたちのメモワールがこれほど数多く出されているケースは、警視庁でも他県警でもあまり例を見ない。

その大きな理由として、沖縄県警がたどってきた歴史の特殊性が挙げられる。沖縄県警が発足したのは、『琉球処分』が完了した一八七九（明治十二）年三月である。

前述したように、その後、他の県警と同様、内務省管轄の警察組織として推移してきたが、本土に先行した沖縄の敗戦で一九四五（昭和二十）年六月、沖縄県警は六十六年の歴史を閉じた。

戦後は、民間の警察官を囚人を含めて促成採用した沖縄民警察（シビリアンポリス＝C.P.）を経て、琉球警察となり、一九七二（昭和四十七）年五月十五日の本土復帰後、戦前の内務省にかわる警察庁管轄のもと、元の沖縄県警に戻った。

本土警察にはないこうした歴史的組織変遷が、おそらく沖縄の警察OBたちに強いノスタルジィを喚起させ、過去に向かって筆をとらせる大きな動機となっている。

古くは大正年間に戦前の沖縄県警入りし、戦後、沖縄民警察の初代部長となった仲村兼信は『沖縄警察とともに』（一九八三年）を書き、C.P.から琉球警察、戦後の沖縄県警を経験して一九七八（昭和

五十三)年に退職した比嘉清哲は、『沖繩警察50年の流れ』(一九九七年)という記録を残した。

やはりCPを皮切りに沖繩の警察官を三十二年間つとめ、那覇署長を最後に退職した太田利雄は『激動の警察回顧録』(〇一年)を出版した。〇五年には刑事畑一筋に約四十年歩いてきた嘉手苺福信が『波瀾万丈の日々』という手記を発表した。

彼らの回顧録には、公的記録の『沖繩県警察史』(全三巻・一九九〇年〜二〇〇二年)や新聞記事ではごく通り一遍にしか報じられていない事件が、ディテールをもって綴られており、それらの記述よりずっと想像力を刺激される。

沖繩の戦後事件簿のなかで私がとりわけ強い関心をもったのは、一九五三(昭和二十八)年夏に発生した米軍現金輸送車強盗事件である。

一九五三年七月六日の午後七時頃、沖繩本島北部の大宜味村で、米軍の給与が覆面をした四人組の沖繩人オキナワ人によって奪われる事件が起きた。ライカム(Ryukyu Command)琉球米陸軍司令部)から受け取ったB円(米軍発行の円表示軍票)約二百万円を米軍奥間通信隊へ運搬中の出来事だった。

B円は日本から分離して沖繩を統治する米軍の重要政策のもと、一九四八(昭和二十三)年七月から一九五八(昭和三十三年)九月にドル通貨制に移行するまで使用された。

犯人らは大きな石を道路を封鎖する形で並べ、車を停めた。犯人の一人は持っていたコルト四五口径の拳銃を取り出し、驚いて車外に飛び出した米人会計係に向けいきなり発砲した。このため、白人会計係は右大腿部を貫通する重傷を負った。

四人組は奪った車ごとその場から逃走した。琉球警察が組織をあげて捜査にあたった結果、事件発生から九日目に犯人四人が逮捕され、事件は解決をみた。

これが『沖繩警察史』や新聞記事に書かれたこの事件のすべてである。

その記述は、占領下の沖繩で米軍の現金輸送車をピストルで襲った大胆不敵な犯行の様態や、二百万円という被害額の大きさに比べると、拍子抜けするくらいあっさりしている。

事件当時の教員の給与は平均五千万円程度だったから、二百万円という被害額は、現在の貨幣価値に換算すれば一億円近い。

この現金強盗事件は、一九五二（昭和二十七年）四月一日の琉球警察発足以来、沖繩で最大の凶悪事件だった。沖繩人がアメリカ人を銃撃して大ケガをさせたというだけでも、当時米軍の占領下にあったこの島では驚天動地の出来事だった。

この事件の深刻さは、四人の被告に下された判決の重さに表れている。

三人が懲役十二年、一人が懲役八年の実刑判決だった。これは、「アントタッチャブル」の米軍に無謀にも鹵向かい、「支配者」の米国人に重傷を負わせた懲罰判決だったことは明らかだった。

『沖繩警察史』や新聞記事の記述に比べると、先に紹介した沖繩県警OBの比嘉清哲が書いた『沖繩警察50年の流れ』は、副題に「犯罪実話物語」と銘打っているように、この事件をかなり細かく報じている。

被疑者の四人組は当時「エリート」と見られた三中（現・名護高校）の出身者だった。うち二人は以前軍作業に従事しており、給料日が間近に迫っていたことを知っていた。犯人のひとり捕まったとき、民家に寝転んで三味線を爪弾きながら「山原節」を口ずさんでいた……

この記述には、事件を担当した捜査官でなければ絶対に書き得ない、底光りした真実が顔をのぞかせている。

この事件は、沖縄県警OBの嘉手苺福信が書いた最新刊メモワールの『波瀾万丈の日々』のなかにも取りあげられている。そのことは、嘉手苺から同書を贈呈されたばかりという琉球新報のベテラン記者を通じて後日知った。彼から借りた同書の記述は、事件そのものの経過より、この事件の奇妙な捜査過程に重点が置かれている。

〈聞き込みを続けているうちに、北部出身のグループらが関係しているとの情報が入った。一味の情報を得るため当時、那覇市栄町の姫百合通りに店を出している北部出身で、私たち捜査員とも顔見知りのKに接触した。案の定Kは有力な情報を持っており、しかもその者たちは私たち捜査員とも顔見知りという。犯人と捜査員、情報提供者がお互いに顔見知りという妙な関係になった。夜半、密かにK宅を訪ねたが、もう情報の提供はできないという。理由は明確だ。お互いに顔がばれると、Kの身に危険が及ぶ。Kのこれまでの善意を無駄にはできない〉

嘉手苺は沖縄本島北部の中心都市、名護の出身である。名護は事件が起きた大宜味村ともごく近い。話し合いの結果、嘉手苺ら三人の名護出身警察官が捜査から外れることを条件に、Kに情報提供を頼むことにした。こうして事件は別の捜査員に引き継がれることになった。

へやがて実行犯を含む一味全員が逮捕された。Kの情報が功を奏したことは言うまでもない。そし

て、私たち三人の捜査員は犯人一味と同じ地域の出身者なので、賞詞等の表彰申請は辞退した。

嘉手苅は刑事警察一本槍でやってきた男である。それだけに、沖繩の暴力団に関して生き字引的な存在だった。沖繩の暴力団について嘉手苅の意見を聞くため、宜野湾市の自宅を何度か訪ねたが、私の質問に的確に答えてくれる嘉手苅の物言いはいつも歯に衣着せずストレートだった。

そんな硬骨漢にしては、『波瀾万丈の日々』の記述は、奥歯にものが挟まったようなところがあり、気になった。

嘉手苅は事件の本質をわざとはぐらかしているのではないか。もっと言えば、知られては困る事実を何か隠しているのではないか。

嘉手苅に対する疑問を抱えたまま、彼が書いた『波瀾万丈の日々』を貸してくれた琉球新報のベテラン記者と会った。最初、雑談のつもりだったが、話題が大宜味村の現金強盗事件に及んで、思わず息を呑んだ。彼の話は想像を遙かに超えていた。

「復帰前の立法院時代に、中村朧兆という議員がいたんです。これが若くて将来を有望視されていたんですが、いろいろと悪い噂がありましてね。最後は変死しているんです。

嘉手苅さんの本にも書かれている大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件にも、中村朧兆が関わっていたという噂があるんです。彼は若い頃、米軍で働いてましてね。それで、現金輸送車の情報をつかんでいたという話なんです。

この事件では四人組の犯人が逮捕されたんですが、なぜか、中村朧兆は逮捕されていないんです。

彼はその後、東京の大学に入って、司法試験にも受かり、沖繩に帰ってきて弁護士になり、立法院の

議員にもなる。ところが、その立法院議員時代、東京に陳情に行っているときに謎の失踪をするんです。

みんな大騒ぎして捜したけれど、行方は一向にわからなかった。数日後、顔に大きなマスクをして、ひよっこり姿を現した。『齒槽膿漏の治療をしていた』というのが本人の弁でしたが、そんな話を信じる者はひとりもいなかった(笑)。

それから暫くして、今度は摩文仁の崖から落ちて、重傷を負う事件を起こすんです。本人は足を滑らせたと言っていました。周りにもつばら、誰かに突き落とされたか、狂言の自殺未遂かと噂していました。真相は結局、わからずじまいでした。

その後、今度は福岡で変死体で見つかる。復帰から間もない昭和五十一、五十二年頃だったと思います」

上京中の謎の失踪事件といい、沖繩本島南端の摩文仁の崖からの転落といい、福岡で変死体で見られた最期といい、何から何まで耳が勃起してくるような話だった。何よりもアドレナリンを刺激されたのは、それらの謎が、敗戦から八年後に起きた米軍現金輸送車強盗事件にからんでいるらしいことである。

大胆に推測すれば、米軍現金輸送車強盗事件に何らかの形で関与したといわれる中村は、逮捕を免れるかわりに仲間を密告し、その恨みからかつての仲間にも復讐されたとも考えられる。

この推測が仮に当たっているとすれば、ストーリー的には、松本清張の『砂の器』とよく似ている。『砂の器』は、過去の忌まわしい出来事を消し去るため殺人を犯し、いまは高名な音楽家となって過去の殺人事件の記憶に苛まれる青年の物語である。中村はこの事件の犯人グループと同じ、名護高校

のOBである。

ベテラン新聞記者から聞いた話の真偽を確認するには、米軍現金輸送車強盗事件を担当した嘉手苺に会うのが一番正確で手っとり早い方法である。

だが、嘉手苺は病氣療養中を理由に会うことを固辞した。仕方なく、電話での一問一答になった。——大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件についてうかがいたいのですが、嘉手苺さんの本を読みますと、あの事件の捜査のことが書かれていますね。

「あの事件は、捜査の途中で担当がかわってます。それを、ああいう形で表現したんです。なぜ、あれだけ大きな事件が別の捜査員に引き継がれたのか。解決すれば間違いなく長官賞ものの事件です。それを、担当者が途中でやめるということはふつうありえないわけです。それを察してください」

——私が知りたいのもそこです。なぜ担当者がかわったんですか。  
「それは聞かないでください」

——元立法院議員の中村眺兆さんという方がいましたね。いろいろと奇行があつた人で、最期は福岡で変死しています。その中村氏が、大宜味村の事件に関わっていたという話を聞きました。それなのに逮捕されず、弁護士になり、立法院議員にもなった。その話は嘉手苺さんもご存じですよ。

——そう質問すると、電話口から「ふ、ふ、ふ……」というしのび笑いの声が聞こえた。嘉手苺のその微笑が、すべてを物語っているような気がした。

「それを私の口から言えますか。実はこうだったという話は、あつてもなくても言える事柄じゃないでしょう。関係のあるなしは、否定も肯定もしません。」

八十になったポケ刑事が、こういう本を出した。その意味は何か。本では深くふれることができな

いこともあるんです。これだけは事実だということを、老人の放談と思って読んでいただければいいんです。琉球政府時代の事実をすべてそのまま書いたら、多くの人に迷惑をかけることになります。適当にアレして書かないと……。これ以上は、もう勘弁してください」

それだけ言うと、電話は切れた。中村と事件に関連があるともないともとれる含みがありすぎる発言だった。

私は嘉手苧の意味深な発言を聞いて、中村眺兆という男に、なおさら強い興味を覚えた。

現金強盗事件と中村眺兆の関係を初めて教えてくれたベテラン記者は最後に、この件に関しては福地曠昭（タカシロ）さんが詳しいはずです、と言った。

福地曠昭は、沖縄の革新勢力を代表する元沖縄教職員会の政経部長である。

嘉手苧から謎めいた言葉を聞いてから数日後、福地に会った。福地は事件が起きた大宜味村の出身である。

福地が中村の人となりについて詳しいのは、福地らの尽力により沖縄で初の人権協会ができたとき、その理事のひとりに弁護士の中村になってもらった過去があるためである。福地の話は最初からミステリー小説じみていた。

「中村眺兆は旧三中時代、仲村渠馨（なかむらぢかほ）といったんです。沖縄から内地の大学に行っているときに、中村眺兆に改名した」

初めて聞く話だった。もし米軍現金輸送車強盗事件が改名のきっかけになったとすれば、水上勉の『飢餓海峡』そっくりである。『飢餓海峡』は、北海道・岩内の大火と青函連絡船・洞爺丸の海難事

故をヒントにして書かれた推理小説である。この小説の主人公の犬飼太吉は、大火と遭難事故を利用して他人の戸籍を詐取し、いまは樽見京一郎と名乗って立派な実業家になりすましている。それを老刑事が執念で解明し、最後は犯人が青函連絡船から投身自殺に追い込まれるやりきれない物語である。中村が内地留学したのは明治大学である。そこを卒業後、東大の大学院に進んだ。一九三〇（昭和五）年生まれの中村は、事件当時は捕まった四人組と同じ二十三歳だった。

——事件があつたのは明治大学に在学中ですか。

「そうだと思います。彼は夏休みによく故郷に帰ってきていましたから。あの事件は新聞に大きく載つたから、よく覚えています」

この事件を報じた琉球新報を見ると、確かに六段抜きの大きな扱いである。見出しは「二百万円の拳銃強盗」「大宜味証の四人組」である。

——中村晁兆はあの事件と関係していたとも言われていますが。

「宜野灣署の宮城という刑事が、彼を一味の仲間と睨んで厳しく尋問したと言っていました。彼は戦後、軍作業の責任者をやっていたから、米軍の内情には詳しいと見られていた。警察の取り調べを受けたとき、中村は『僕が東大の大学院を出て司法試験に合格したら、きみたちを死刑にするから覚えておけ』って言ったそうです」

福地の話は聞けば聞くほど謎だった。

中村はその言葉通り、東大の大学院を修了後、弁護士資格をとっている。

沖縄では、復帰前に米国民政府や琉球政府の弁護士法で資格をとり、復帰後も特別移行措置でその資格が維持された。布令弁護士が多かった。だが、日本の司法試験に正式に合格した中村は、沖縄

社会では彼らに比べ一段上に見られる存在だった。

「彼は弁は立つし、若くて元気もあるし、学歴も東大の大学院だし、色も白くて長身だったので、モテにモテた。立法院議員時代は、沖繩のプリンスと言われてね。味の素の顧問弁護士をやっていたから、金もあつたし。立法院議員の給料なんて小遣いだと言っていた。高級車を乗り回していたから、酒場の女にや余計モテた」

元沖繩タイムス記者の当山正喜が立法院時代の沖繩の政治裏面史を書いた『政治の舞台裏』（沖繩あき書房・一九八七年）という本のなかに、中村をよく知る元県教育長で、復帰後三代目の西銘順治知事時代に副知事をつとめた翁長助裕のこんな談話が紹介されている。

〈中村という人物は、どこにいても会場がどよめくほどのスターだった。今まで彼ほど人気のあつた政治家は見たことがない〉

——立法院議員時代に東京に陳情に行つて、失踪するという謎の事件がありましたね。

そう質問すると、福地は言った。

「ええ、あの事件では暴力団に追われていたんじゃないかという話もありました」

——暴力団にアイスピックで顔を傷つけられたという噂もあつたそうですね。大きなマスクはそれを隠すためだった。

「中村はあの現金輸送車強盗事件で分け前をもらつて日本に高飛びをした。そんな古証文をネタにされて脅された。真偽のほどはわかりませんが、そんな噂もありました」

この事件は「姿くります中村議員」の見出して琉球新報にも大きく報じられた。

中村が失踪したのは、上京中の一九六六（昭和四十二）年七月五日の深夜のことである。この日は、奇しきことに大宜味村の現金輸送車強盗事件からちょうど十三年目にあたっていた。

この当時、沖縄民主党のホープと目されていた中村が、立法院議長の長嶺秋夫、社会大衆党委員長の安里積千代とともに上京したのは、裁判移送命令問題について本土政府関係者と折衝するためだった。

裁判移送問題とは、琉球政府の裁判所に審査権はないとして、「沖縄の帝王」といわれた米高等弁務官が、係争中の裁判を米国民政府裁判所に強制的に移送を命じたことを指している。折からの自治権拡大運動のなかで、移送撤回を求める県民大会が開かれるなど、沖縄では大きな反対運動のうねりが起きていた。

三人は七月三日に上京して、佐藤栄作首相ら本土政府関係者と折衝を始めた。五日も三人揃って行動し、宿泊先の「新橋第一ホテル」に戻った。

ところが、六日朝、帰っていたはずの中村の姿は部屋のどこにもなかった。中村の失踪から三日後の七月九日、長嶺立法院議長は、警視庁に捜索願いを出した。

〈警視庁は九日午後十時、捜査初日の成果を持ちより協議したが、当面、五日夜、赤坂のナイトクラブ「コパカバーナ」を出て乗ったタクシーの発見に全力をそそぐとともに琉球警察本部に中村議員の身辺にかんして手がかりとなる資料の提供を求めている〉（『琉球新報』一九六六年七月十日付）

中村から突然連絡があったのは、失踪から五日後の七月十一日だった。歯痛のため、渋谷区並木橋の歯科医院に入院していたという。この無責任きわまる中村の態度に沖繩県民は激怒した。

同年七月十二日付の琉球新報のコラムは「あきれた中村議員の歯痛」と題して中村を痛烈に批判している。

同紙は同じ日に「中村失踪事件の裏表」という東京総局記者座談会を載せている。

そこで記者から挙げられた失踪の理由は、裁判移送問題にまつわる米側の謀略説、暴力団脅迫説、女性問題トラブル説など、キナ臭いものばかりだった。

前掲の『政治の舞台裏』は、失踪事件についてこう述べている。

〈失踪の原因は、表面上歯痛となっていた。事実中村は東京渋谷区の並木橋歯科医院に入院していたが、真相は、暴力団による傷害だった——との説も政界の一部ではささやかれた。その証拠に中村は入院直後、当時警察本部長だった新垣淑重（前県議）に「ヤッチー、やられた」と電話をしてきたという。（中略）

この失踪事件で心身とも苦勞させられた長嶺秋夫は「朝日新聞の記者から渋谷の歯科医院にいると聞いたので飛んでいった。顔を見るなり何もいわずピンタをはってやった。痛いようでもなかった。彼は覚悟を決めていたようで、辞表を用意していた。私は何もいわずにそれを受け取った」

同書は、中村のその後の数奇な運命についても言及している。

六月十八日、民主党幹事長・桑江朝幸は、中村の議員辞職と党籍離脱を発表した。六二年十一月立法院議員に当選、保守界の次代を担うホープと騒がれた中村も三年半の短い政治生命であった。それどころか、その後中村は摩文仁で自殺未遂（それも暴力団絡みとの説が政界一部にはある）したあとついに福岡で非業の死を遂げ、若き人生にピリオドを打つ。

中村の議員辞職と党籍離脱が失踪事件前の六月十八日になっているのは、おそらく失踪事件に遡って引責を求めたからである。ちなみに『沖縄県議会史』に記載された正式の記録では、中村の議員辞職は六月三日となっている。

話を福地のインタビューに戻す。

——摩文仁の崖から転落したのも、自殺未遂ではなく、実は暴力団に突き落とされたらしいですね。「実際に見たわけじゃないが、そういう話もありました。政界の輝けるプリンスが、どうしてあんなことになったのかって、私らみんな不審に思ったものです」

福地の話は最初から最後まで疑問符の連続だった。

というより、中村の四十六年の短い生涯そのものが、大いなる謎だった。

中村の死を伝えた沖繩の新聞は沖繩タイムスだけだった。

記事はごく短く、その扱いの小ささに、かつて沖繩政界のスターといわれた男の零落ぶりが読みとれる。

〈読売新聞二十八日付九州版によると、二十二日福岡県糸島郡二条町福井大入の旧国鉄宿舍内でみつけた変死体は、地元警察の調べの結果、東京都港区青山三―四―一五竹中マンションA―5弁護士・中村昶兆氏（四六）であることが判明した。死後七日から十日ほどたっていた。現場には睡眠薬の空びんがあり、黒のコートに背広。黒カバンをまくらにしていた。警察では、自殺とみている。二十九日検死する。〉

中村氏は、昭和五年生まれ今帰仁村出身。明治大学法学部卒業後、弁護士を開業。一九六二年から琉球政府立法院議員を二期つとめた（一九七六年四月二十九日付）

沖縄タイムスの記事は文中にもある通り、読売新聞西部版の前日の記事の配信を受けて書かれたものである。

読売新聞西部版の記事は沖縄タイムスの記事に比べてかなり詳しい。

少し長くなるが、中村の謎めいた最期を知るため、沖縄タイムスと重複する中村の発見場所や中村の住所などは省略して、全文引用しておこう。

へさる二十二日、（中略）見つかった男の変死体は、福岡県警前原署の二十七日までの調べで、（中略）弁護士中村昶兆<sup>あきあき</sup>さん（四六）とわかり、同日、実兄が確認して遺骨を引き取った。他殺の疑いはないと断定されたが、自殺に結びつくような動機もはっきりせず「ミステリーだ」と刑事は首をひねっている。（中略）

死体は洗面道具の入った黒革カバンをマクラに両手を胸に組んで横たわっており死後約一週間。

同署では、真新しい背広にぬいこまれた「中村」と「東京・銀座、英國屋」のネームを手がかりに、身元を調べたところ、二十六日になって、英國屋の注文書から中村さんの住所、電話番号がわかった。また、九大病院で解剖した結果、他殺の疑いはなかったが、死因ははっきりしなかった。

中村さんは十年前に離婚、現在、法律事務所の手伝いをしているメイの神谷サト子さん（二五）と同居しており、三月十四日「沖繩に行く」と自宅を出たまま。

恭典さん、神谷さんの話によると、中村さんは、三十一年に明治大学法学部を卒業、四十四年六月、弁護士を開業して東京第一弁護士会に所属。開業後は弁護士のかたわら、経営コンサルタントの仕事もしていた。

中村さんはことし一月三日、脳血センで倒れ、二週間入院。自殺とすれば原因はこれだけ。しかし恭典さんは「それを苦に自殺するような性格ではない」と否定的だ。

意味がよくとれない箇所や、誤りも多い記事である。その後の調べで、記事中にある恭典さんとは、死体を確認した中村の実兄だということがわかった。また、記事には中村が十年前に離婚とあるが、その事実がなかったことも判明した。

この変死事件を担当したのは、『激動の警察回顧録』を出した元那覇署長の太田利雄である。当時太田は沖縄県警の刑事部長だった。

——中村氏の変死の連絡がきたのは福岡県警からですか。

「ええ、そうです。連絡は私が受けました。私は刑事部長になる前、九州管区警察局長刑事課長をやっ

ていましたので、福岡県警の幹部を全部知っていました」

——知らせを聞いたとき、どう思われましたか。

「そりゃ、びっくりしました。なんでテルアキがあんな死に方をしなきゃならないんだって。行路病死人扱いですからね」

——ということ、中村氏の変死は最初から事件扱いではなかったんですね。

「ええ、事件扱いではありませんでした」

——過去の事件でも暴力団に脅されたという見方がありましたね。

「そういう噂は確かにありました。だけどそれを裏づけるものは何もない。暴力団の関与説は、福岡のときもありました」

——ほお、福岡のときもあつたんですか。

「本当にテルアキの死因は謎だと思いました。でもきちんと検死が入りましたから、疑問を差し挟む余地はなかった。

もし暴力団がそれらの事件に関係していたとしたら、沖縄以外の組織でしょうね。それにしても残念です。われわれとしては、テルアキは前途ある政治家だと思つていたんですがね」

——福地曠昭さんも、彼が生きていたら沖縄の政治はひよつとすると変わつていたかもしれない、と言っていました。

「ま、そんなに持ち上げることはないと思いますが（笑）。でも有望株だったことだけは確かです」

——もう半世紀以上も前の現金強盗事件にも絡んでいたという話もありますね。

「あの事件にはテルアキはまったく関係なかったと思います。あの事件の犯人は検挙され徹底的に取

り調べられましたからね」

中村眺兆は追えば追うほど謎が深まる男だった。

それは喩えて言えば、疑問の投網なまを投げても投げても、まったく手応えがない南国なんごくの陽炎かげんのゆらめきのようなだった。

琉球新報社長の宮里昭也は、中村が失踪したとき同紙東京総局の第一線記者だった。

その宮里によれば、中村がある筋から追われていたのはたぶん間違いないだろうという。

「中村に資金的な援助をしていたグループがあったらしいんです。ところが段々と羽振りがよくなって、政界でもホープ扱いされてくるうちに、彼らの思い通りにはいなくなりました。つまり政治的配慮をしてくれなくなりました。」

それを恨んで拉致されたり、摩文仁の崖から突き落とされたんじゃないか。そんな話があったことは聞いています」

——中村ってどんな男だったんですか。

「軽い感じの男でした。付き合いは非常にうまくやるんですけど、深く付き合い合う男じゃなかった。うわべはいいんだけど、あんまり人から信用されるタイプではなかった」

前に紹介した『政治の舞台裏』に、立法院の政権党だった沖縄自民党の内紛騒動と、これにつづく保守政党のクーデター劇が取りあげられている。

沖縄自民党総裁で行政主席だった大田政作批判の急先鋒が、立法院議員に初当選間もない中村だった。中村は自民党集団脱藩組の首謀者となり、沖縄民主党の旗揚げをした。

ところが、この政変劇の立役者だった中村は新たに結成された沖縄民主党の人事に不満を募らせ、同党の総裁に選出された松岡政保の追い落としかかった。

中村は反松岡派の稲嶺一郎に近づき、造反劇を仕掛けた。だが中村は保守陣営の西銘順治など大物への根回しを怠ったため、クーデター計画は未遂に終わった。

——脱藩騒動を起こしたり、クーデターを画策してみたり、たしかに中村というのは信が置けないくせに、自分を恃むところだけは強烈にあった男らしいですね。その昔、自民党を集団脱党して新自由クラブを旗揚げした山口チンネン（敏夫）みたいに。

「ああ、山口敏夫。そうです、そうです。まさにあんな感じがしました」

中村の挫折は過信のせいだったのか、それとも過去の罪に躓いたせいだったのか。東大の後輩でやはり弁護士になった金城睦は、中村には金銭的にいつも困っているような雰囲気があったと言う。

「中村さんから、小銭を貸してくれと言われたことがあります。僕にはちゃんと返してくれましたが、踏み倒された人が多かったという話を耳にしたことはありました」

金城にも大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件にまつわる話を聞いてみた。

——その事件に中村氏が絡んでいたという話がありますよね。犯人の四人組は捕まって服役するんですが、服役中に中村氏はすっかり偉くなってしまった。オレたちだけが臭いメシを食ったのに、何であいつだけがいい思いをしているんだ。

それが後の失踪事件や、摩文仁の転落事件を惹起する心理的引き金になった。これはあくまで私の「見立て」です。ただ、中村氏が若い頃、四人組と一緒に「戦果アギヤー」をやっていたことだけは間違いないようです。

そう質問すると、金城は、「僕もそういう噂は聞いたことがあるような気がします」と答えたあと、自分の方から宮里松正ちよしという男の名前を持ち出した。

そして「宮里さんが生きていたらなあ」と、さも残念そうに呟いた。

中村や金城と同じ弁護士仲間の宮里は、中村の三中時代の先輩にもあたっていった。

金城によると、宮里は若い頃「戦果アギヤー」の親玉として知られており、数々の武勇伝の持ち主だったという。

「宮里さんは中村さんと同じ今婦仁いまの出身ですし、米軍現金輸送車強盗事件のことも詳しく知っていませんじゃないかと思うんです。宮里松正ちよしというのは、いかにも貴公子然とした中村さんとは違って豪快な男でした。

これは宮里さんにごく近い人から聞いた話ですが、「戦果アギヤー」に行つて検問にひっかかりそうになったことがあるそうです。そのとき乗っていたのが、何と基地から盗んだアンブランス(ambulance)＝救急車)だったと言っています。松正は検問を見ても動ぜず、『よっしゃ、鳴らせ』と言つてサイレンをウー、ウー鳴らしながら、車をバーツとぶつ飛ばして、堂々と検問を突破しちゃった(笑)」

「戦果アギヤー」あがりの宮里は、本土復帰当時の沖縄県副知事である。

天皇后御臨席のもと日本武道館で行われた復帰記念式典には、佐藤栄作総理、福田赴夫外相、竹下登官房長官、アグニュー米副大統領という錚々たるメンバーと並んで沖縄県代表として列席した。

いまから半世紀以上前の米軍現金輸送車強盗事件への興味から、中村晁兆という男への関心が呼び覚まされた。

そしてその取材の過程で、天皇后御臨席の式典に列席する榮譽に浴した元々「戦果アギヤー」の沖縄県副知事がいたという意外な事実を知ることができた。

その後、中村と同郷出身の弁護士や、中村の未亡人、中村と親交があつた米軍キャンプあがりの実業家、そして故郷に残る中村の近親者たちに会つて、これまでまったく知らなかつた沖縄の現実をさらに深々と覗き込まされることになつた。

いまとなつては中村眺兆の名を知る沖縄人はほとんどいないだろう。

だが私にとつて中村眺兆は、どんな本にも書かれていない沖縄戦後史の扉を静かに開き、知られざる世界に誘つてくれる、古代沖縄の巫女にも似た不気味な存在にいつしかなつていた。

## エリート議員の失踪と怪死

那覇港からそう遠くない那覇市西一丁目のマンションに事務所を開く西平守儀は、沖縄戦後史の光と影を散乱させて怪死した中村眺<sup>よき</sup>と最も親しかった弁護士である。

西平に会ったのは、同郷で同じ弁護士仲間の西平なら謎めいた中村の失踪事件や摩<sup>ま</sup>文<sup>ぶん</sup>仁<sup>に</sup>の崖からの転落事件、そして最期の変死について、何か知っていることがあるだろうと思っただからである。

——西平さんは中村氏とは三中（現・名護高校）の同級生だったと聞きましたか。

「いや、三中は違います。小学校と琉大（琉球大学）で一緒でした」

琉球大学は一九五〇（昭和二十五）年、アメリカの民主教育の高度普及という文教政策のもと、米施政権下にあった当時の沖縄で唯一の総合大学として創設された。

——彼は三中から琉大に行ったんですか。

「彼は小六から三中に行き、琉大に入った。私と彼は琉大の一期生です」

——すると、琉大から明治大学に行き、そこから東大の大学院に進んだんですか。

「そうです。彼は口を開けば、東大、東大って言っていましたね（笑）」

西平によれば、中村が弁護士を開業したのは一九六二（昭和三十七）年の春だったという。

「僕と二人で事務所を開いたんです。ところが、それから暫くしたら立法院議員に立候補するという

話になった。彼はやる気満々でね。対立候補のない信任投票で当選しちゃった。それからが大変でした。彼が議員になったので、二人分の仕事をしなくちゃならなくなりましたからね。それで彼が議員になって一年ほどして、事務所を別々にしたんです」

中村が立法院議員に初当選したのは、一九六二年十一月に投票が行われた第六回立法院総選挙である。弁護士事務所を西平と一緒に始めて約半年後のことだった。

「でも、次の選挙のときは最初の選挙のときはすっかり人が変わっていました」

中村にとって二期目にあたる第七回立法院総選挙が行われたのは、一九六五（昭和四十）年十一月である。中村はその任期中の一九六六年七月に東京で失踪事件を起こした。

——人が変わったという？

「二期目の選挙のときは、同期生がみんな離れたんです。私も離れたし、一番のスポンサーだった島産業不動産のオーナーの島繁勇も距離をとるようになった」

島は中村と同じ三中のOBである。島にはすでに連絡をとっていた。だが電話をすると、少し前に脳梗塞で倒れたため、会うのは勘弁してほしいとの返事だった。このため、西平と会った時点ではまだ島本人の話は聞いていなかった。

「そのとき島は、政治資金集めの責任者が西平ならば、自分がいくらでも金をつくるが、そうでなければもう出さん、と僕に言ったんです。結局、僕は責任者にならなかった。そのとき彼はもう、僕らのわからん世界に行っていたんです」

——つまり、最初の選挙のときに応援した同じ山原出身の西平さんも島さんも、わけのわからん連中と付き合いはじめた中村から離れたというわけですね。

「はい。亡くなった人を悪く言いたくはないけれど、彼は立法院議員になって、俺のものは俺のもの、人のものは俺のもの、という人間に変わってしまった。(那覇の飲み屋街の)桜坂で飲んでいても、カウターのなかに入りシエーカーを振って、ジョニ黒をボンボン空ける。そのツケが全部、事務所に回ってくる。若い頃は、みんなの期待を一身に集めた沖繩の希望の星だったんですけれどねえ……」

——女性関係もハデだったようですね。

「噂はいっぱいありました。それはモテましたからね。背も高いし、顔もハンサムだし、歌もうまいし。キサス、キサスなんていう歌を原語で歌うんです」

——鼻持ちならないヤツですね。

「でも会っているときは本当にいいヤツなんです。彼を悪く言う人はいなかった。若い頃は、カオルと呼ばれて可愛がられるナヨナヨした少年だったんです」

——カオルというのは、中村晁兆に改名する前の仲村渠馨なかむら けんぎの馨のことですね。

「ええ。それからすぐ例の失踪事件が起きた。政治の世界に深入りするに従って金銭的な問題が出てきたんだと思います。摩文仁の崖から転落したときも、いろいろな噂が飛び交いましてね」

——どんな噂ですか。

「あんなところから間違っても落ちるはずがない、もし間違って落ちたなら命がないだろう、と。崖の下に隠れていたんじゃないかという話もありました」

——自殺未遂の狂言というわけですね。

「ええ、ちょうどその頃、タクシー業界の汚職事件が発覚したんです」

タクシー汚職事件は、一九六八(昭和四十三)年に発覚した疑獄事件である。個人タクシーの免許

取得を巡り金品の授受があつたとして、当時副首席だつた小渡二郎を含め琉球政府の幹部約百二十名が逮捕された。

——タクシーといえば、中村の実兄もタクシー会社をやつていましたね。その事件には彼も絡んでいませんか。

「絡んでいたどころか、そのお兄さんにあげたんですよ。タクシー会社を」

——エッ、眈眈自身がですか。それじゃ完全に利権目的の「政治屋」だ。

「そうです。彼自身がタクシーの営業免許をとつてやつて、何十台かの車を持つタクシー会社をお兄さんのためにつくつてやつた。すべて彼の采配でした」

——ところで、中村は一九七六（昭和五十一）年四月に、福岡の片田舎で変死体で見つかりますね。

「死体の確認には、東大の大先輩の真喜屋実男先生が行きました。先生は『中村は凍死したんだ』と言つてました」

——凍死？

「その晩は、福岡にたまたま何十年ぶりの寒波がきたんだそうです。で、睡眠薬を少し飲んで酒をやつていりうち、寝込んでしまつたらしい。所持金は十数円しかなかったそうです。僕は先生に『原因は何ですか』と聞きましたが、先生は『いや、それはもう、僕は聞かなかつた』と仰つてました。結果がそうだというだけで、もう十分だと」

西平に会つて一番聞きたかつたのは、一九五三（昭和二十八）年に大宜味村で起きた米軍現金輸送車強盗事件のことだつた。

——中村がその事件に絡んでいたというんです。聞いたことはありませんか。

「聞いていません。ただ、軍作業をやっていたとき、悪さはしていましたね。彼はチェッカーをして  
おったんです」

——チェッカー？

「配車係のことです。それでトラック一、二台分のビールをチェックしたことにして、金武湾の料亭  
に持って行って転売するんだそうです。それを米軍の憲兵に知られたので、改名したという話は聞いて  
たことがあります」

これは注目すべき発言だった。元沖縄教職員会政経部長の福地曠昭は、大宜味村の事件を担当した  
宜野湾署の宮城という刑事から、中村をあの事件の犯人一味と睨んで取り調べたという話を聞いている。  
この二つの話を重ねると、こんな想像が浮かぶ。

中村は「戦果アギヤー」仲間だった顔見知りの犯人たちから脅されて、米軍現金輸送車の運搬時間  
と運行ルートを教えた。米軍のチェッカー経験がある中村なら、それを調べるのはたやすかつたはず  
である。若い頃の中村は女のおとなしなかつたというから、彼らの要求を無下には断れなかつた  
という想像も働く。

私は西平と別れた後、事件に絡んで中村を調べたという宜野湾署元刑事の宮城義和に会おうと思っ  
た。宮城の自宅は沖縄本島中部の北中城村屋宜原にあり、前述した元「東京トルコ」に近い。

そこを訪ねると、門は閉まっており、留守のようだった。

諦めて帰りかけると、夫人らしい女性が家に入っていくのが見えた。

入院中の夫を見舞って、いま帰宅したところだと言う。用件を伝えると、夫人は気をきかして、

「それでは、病院に電話して夫に聞いてみましょう」と言つて、質疑内容がこちらに聞こえるようにする配慮からか、ドアを開けたまま玄関先に置いてある電話をかけはじめた。

「お父さん、いま東京の雑誌社の人が来て、お父さんが担当した事件について聞きたいって言っているんだけど。昭和二十八年に大宜味村であつた米軍の現金輸送車の強盗事件に、元立法院議員の中村眺兆さんっていう人が関わつてたんじゃないかって……」

夫人の説明は元刑事の妻らしく、要領を得たものだった。暫くやりとりがつづき、電話を切つた夫人は、夫から聞いた伝言内容を簡潔に説明してくれた。

「その事件については、申し訳ありませんがお会いしてお話しすることも、電話口でお話しすることもできないと申しておりました。お役に立てず本当に申し訳ありません」

それだけ聞けば十分だった。もし、大宜味村の事件と中村がまつたく無関係だったとすれば、わざわざそんな丁寧な答えをする必要がない。宮城の含みのある答えそれ自身が、事件と中村の間に何らかの関係があつたことを言外に認めていた。

沖縄県警OBの嘉手苺福信かてまきふしゆが書いた『波瀾万丈の日々』には、大宜味村事件の担当者として、福地が事件と中村の関係を聞いた宮城とは別に、四人の刑事の実名が出てくる。三人は物故しているが、平田直正という元刑事が健在だということがわかつた。零細な飲食店が密集し、低い家並みが連なる那覇市大道の奥にある平田の自宅を訪ね、来意を告げると、夫人らしき初老の女性が出てきた。

——その昔、ご主人が捜査に関わつた大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件のことをお聞きしたいんですか。

そう切り出すと、普段着の女性は、さもすまなさそうに答えた。

「主人は緑内障で失明して、目が見えません。それ以来臥せっております。事件はもう過去のことですし、逮捕された方も罪を償って社会に出てきています。そんなわけで、せっかく遠い所を来ていただいて申し訳ありませんが、お役に立てないと申しております」

———そうですか。では、あの事件の資料などはお持ちじゃないでしょうか。

「以前には少しあったんですが、二年ほど前に全部焼却してしまいました」

嘉手苅はじめあの事件を担当した刑事から、事件と中村の関係を聞き出すのは、これ以上はもう無理だった。あとは中村の未亡人や、故郷の今帰仁に残る中村の親類、それに若い頃中村と親しかった友人を探して話を聞くほかなかった。

中村の未亡人の中村よねは、税理士事務所を兼ねた那覇市中心部の久茂地のマンションに住んでいた。そこに連絡すると、よねは案内簡単に出ることを約束してくれた。

國場組の本社近くのホテルで会ったよねは、ゴマ塩の髪をひつつめにした、いかにもキャリアウーマン風の初老の女性だった。聞きたいことは山ほどあった。

———ご主人と知り合ったきっかけは何だったんですか。

「明治大学の法学部で同じ研究室だったんです。弁護士資格ですか？ その時代はまだです。私はその後、明治の大学院で税理士の免許を取り、あちらは東大の大学院で弁護士資格を取ったんです」

———お生まれは福島県で旧姓は小針と聞きました。東北の「政商」として有名な元福島交通社長の故小針曆二氏とは親戚になるんですか。

「ええ、出身は福島です。旧姓は小針ですが、小針曆二さんとは関係ありません」

——なるほど。結婚は何年ですか。

「それは聞かれると思つたんですが、戸籍を見ないとわかんないなあ（笑）。えーつとね、大学院を卒業してまもなくですから、私が二十四くらいのときです」

よねは一九三三（昭和八）年の生まれだから、結婚は一九五七（昭和三十二）年頃ということになる。

「テルアキは私より三つ年上でした。彼は琉大を二〜三年やってから、潜水艦で沖縄からやってきたと言つてました」

——ええつ、潜水艦ですか。

「まだ留学ができないというか、本土には正式に行けなかつた時代です」

中村が一九五〇年に開学された琉大に二、三年行つてから日本に來たということは、一九五二、三年頃に本土に渡航したことになる。もし本土への渡航が五三年ならば、大宜味村の事件と同じ年である。

よねが言うように、中村がその年に潜水艦で本土にやつてきたとするなら、その潜水艦は当時の状況から考えて、米軍の潜水艦と考えるのが自然である。

ここから自然に浮かんでくるのは、こんなミステリー小説じみた連想である。

大宜味村の事件で警察に疑いをかけられた中村は、かつてチェッカーとして働いた米軍に、捜査協力することを条件に救いを求めた。米軍は英語が堪能な中村を高く評価し、利用価値があると考えた。想像をさらにたくましくすれば、米軍はCIC（米軍対防諜部隊）の要員になることを条件に、この取引に応じた可能性も否定できない。そして、米軍の潜水艦で日本に逃がした。

東大の大学院を修了し、弁護士から立法院議員になる沖縄のエリートコースを歩んだ中村は、アメリカにとってきわめて重宝な存在だったに違いない。

その後の失踪事件や摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の怪死も、CICの謀略がらみの事件だったとすれば、それなりに納得がいく。

だが、これはほとんど根拠らしい根拠がない勝手な推測に過ぎない。

それはそれとして、中村の周辺には、なぜ潜水艦での本土渡航といった謎めいた話ばかりが渦巻いているのだろうか。

彼女の話でもう一つ興味深かったのは、中村家の先祖に関する話だった。

——中村さんの旧姓は仲村渠ですね。どんな家柄だったんですか。

「私の聞いた範囲で言えば、琉球王室の落とし胤おとしだったそうです（笑）。首里城に仕える士族だったんですが、明治の廃藩置県で左遷され、都落ちして今帰仁いまへいに行った（笑）。廃藩置県のときは、大和につく方と清国につく方に分かれて、清国につく方に回ったらしい。つまり「負け組」に入っちゃった（笑）。だから私に言わせると、最初から政治的に不運なDNAを持った人だったんですね」

——それじゃ、家がものすごく貧しかったというわけじゃないんですね。

「家柄はよかったですよ。私が知り合った頃は、もうどん底だったですね。兄弟はみな頭がよかったです。テルアキ以外は大学に行っていないはず。お父さんは戦時中、サイパンに出稼ぎに行つて家に仕送りしていたという話です」

——中村さんは立法院議員の二期目の途中に東京で失踪事件を起こします。あの事件について何かご主人から聞いていることはありませんか。

「いえ、何も言いませんでした。私にもあの事件はよくわからないんです。本人は学生時代から、放浪癖がありましたから、その癖が出たんじゃないかと思つてますが……。大体、私は普通の夫婦と違つて、お互い相手のやることに無頓着なんです」

——それじゃ摩文仁の崖から転落した理由も、ご主人に聞かなかつたんですね。

「はい、聞いても説明するような人じゃありませんから」

よねは中村が福岡で変死体で見つかつたときも、現場には行かなかつたという。

「検死してくれたお医者さんのところには、だいぶたつてお礼の挨拶には行きましたが。脳血栓の発作が突然起きたんじゃないか、というのがお医者さんの説明でした」

——お子さんはいなかつたんですか。

「はい。いなかつたから、両方とも勝手なことをやっていたんでしようね（笑）」

そろそろ、大宜味村の米軍現金輸送車強盗事件について切り出す潮時だった。

——あの事件に若き日のご主人が絡んでいたという話があるんです。

よねはこの質問を全否定すると思つた。だが、返つてきたのはむしろ肯定気味の意外な答えだった。「もし絡んでいたとすれば、ジミーペーカリーの社長さんとか、スカリーさんという不動産屋の社長さんなんか聞いた方が早いんじゃないですか。その二人とは仲がよかつたから」

——えつ、ジミーペーカリーの社長さんと、スカリーさんですか。初めて聞く名前です。彼らは二世なんですか。

「いいえ、若い頃進駐軍で働いて、事業で成功した人です」

よねに二人の連絡先を聞いたが、知らないという。彼らの連絡先は後で調べることにして、質問の

矛先を中村の親族関係に変えた。

——中村さんの変死を報じた新聞によると、遺体の確認に行ったのは実兄の恭典さんだったそうですね。ご健在ですか。

「いいえ、もう亡くなりました」

——その新聞記事には、中村さんは十年前に奥さんと離婚し、当時は姪にあたる神谷サト子さんという方と同居していたとも書いてあるんですが。

「離婚はしていません。だから亡くなった後、相続放棄したんです。サト子さんというのは、お姉さんの子どもです。あの頃、テルアキは東京と沖繩を行ったり来たりしていましたから、東京のマンションで一緒に住んでいたんです」

妻と離婚しないまま、姪と同居する。中村のやることは聞けば聞くほど謎だった。

よねは、最後にこんなことを言った。

「テルアキは皆さんが寄ってたかつて食い殺したな、という気はしますね。親戚じゅうが、能力ある者に皆でぶら下がってね。美空ひばりと同じですよ（笑）」

——沖繩の門中意識の悪いところですね。

「ええ、別の見方をすれば、あの戦争で生き残ただけでもよかったのかもしれないが……。戦争中は斥候兵<sup>ちしこうへい</sup>として使われたみたいですよ。人が死んでいるのも随分見たり。だから家のなかには赤いものを置いてくれるな、と言ってました。赤い色は血を思い出すんでしょう。沖繩観光のお客さまが来てもひめゆりの塔に案内するなんてことはとてもできない、と言ってました。案内役はいつも私にさせていました」

よねの話は大宜味村の事件や、その後の謎めいた事件を解明する直接の手がかりにはならなかった。だが、中村眺兆という人物の内面を知る上では、大きなヒントになった。

明治の琉球処分が名門の仲村渠家の没落の始まりだったこと、家が貧しく親戚じゅうで優秀な中村に頼ったこと、沖繩戦で幼い中村の精神が深く傷ついたこと……。それらのことを考えあわせると、中村の謎に満ちた四十六年の短い生涯そのものが、戦後沖繩の治癒不能なトラウマの軌跡だったといえなくもなかった。

よねに会った翌日、中村の故郷の今帰仁村を訪ねた。

今帰仁村は、沖繩本島北部の本部半島の突端にあり、那覇から車で三時間近くかかる。隣の本部町は、沖繩海洋博会場跡地につくられた美ら海水族館などを訪れる観光客で賑わっていたが、今帰仁村に人影はほとんど見当たらなかった。

眩しいほどの常緑樹に覆われた集落は、道に落ちる木々の影ばかりが濃い、南国の田舎の鬱囲気を強くにじませていた。あたりの風景はどれも濃淡がくつきりして、目に痛いようだった。

沖繩の難読地名として、勢理客（浦添市）、大工廻（沖繩市）などと並んで必ず例に挙げられる今帰仁は、糸満、宮古とともに沖繩三大美人の産地といわれる。

中村のことを知っていそうな関係者を探すため、まず役場に行った。玄関先にハイビスカスの花が咲く木造の役場は土曜のため、宿直の女性が一人いるだけだった。

役場の建物はセピア色の古きよき時代を感じさせて、沖繩映画のセットのようだった。宿直の女性は、親切に心あたりのところに電話連絡してくれた。その結果、村には中村の従兄弟、実妹、それに

中村と一緒に軍作業をやった人物がいることがわかった。

最初に中村の従兄弟の家を訪ねることにした。白い一本道の両側にパイナップル畑が広がるだけの単純な風景は、初めてこの村を訪ねた者の方向感覚をかえって狂わせた。

ある民家で道を尋ねると、庭で立ち小便の途中だった六十年配の男が、そのままの恰好で振り返り、目的の家を教えてくれた。そんな田舎者丸出しのふるまいとは対照的に、振り向いた顔だけはハツとするほど彫りが深く、スペイン人を思わせた。

東シナ海に臨んで異国人の渡来が容易な今帰仁は、やはり混血の美男美女の特産地らしかった。日本人離れしたイケ面老人から聞いた家を訪ねると、従兄弟は野良仕事に出ているらしく留守だった。

仕方なく近所の南欧風リゾートホテルに勤める従兄弟の息子を訪ねた。だが彼が言うには、早くに東京に出た中村についてはほとんど何も知らないとのことだった。

同じ集落に住む中村の実妹にも会ったが、近所の畑で作ったウコンを仕分け作業中の実妹夫婦からも、同じ理由でこれといった話は出なかった。

中村の幼なじみからも、中村家は土地がなかったため、海に潜って蛸捕りをして生計を立てていた、といった程度の話が出ただけで、中村にまつわる一連の事件については何も知らなかった。

そんななかで、渡久山祐弘という村会議員だけは、中村がらみの謎の事件の一端を知っていた。

渡久山は「摩文仁の崖の下の方から人のうめき声が聞こえて、救出されたと聞いています。何でも崖の途中の木にひっかかっていたとのことでした」と言った。

中村とは竹馬の友で、軍作業も一緒にやったことがあるという渡久山は、そう言う一方で、大宜味村の事件で逮捕された四人組は、中村と同じ今帰仁の運天地区の生まれだが、彼らと幼なじみだった

中村は、あの事件には絶対絡んでいない、と断定した。

「私はあの事件で捕まった犯人四人を知っています。全員この近所に住んでいました。主犯格の男はいかにも強盗をやりそうな雰囲気のやつでした。非常におとなしなかったテルアキとは、まったくタイプが違っていたし、親しくありませんでした」

——では立法院議員時代の上京中の失跡事件や、摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の変死は、どう理解されますか。私には中村氏が大宜味村の事件に何らかの關係を持っていて、それが影を落としているような気がしてならないんです。

南国の光が眩い庭先で取材に応じた渡久山は、私の見方をきっぱりと否定した。

「あれは沖繩の政治の世界に若くして入り、急速に伸びて行くのを、出る杭は打たれるの喩え通り、寄ってたかつて潰されたんだと思います。失踪事件も摩文仁の事件も最期の変死も、大宜味村の強盗事件と關係があつたとは思いません」

結局、今帰仁では中村と事件の關係を窺わせるこれといった情報は得られなかった。紺碧の海と白砂がきらめくこの村で聞こえてきたのは、むしろ否定的な意見ばかりだった。

今帰仁から那覇までの帰路、浦添に立ち寄った。中村の親類から、浦添に中村曙光の実兄の恭典の未亡人が住んでいると聞いたためである。そこに当たれば、中村が変死したとき、中村と同居していたと新聞に書かれた姪の神谷サト子の手がかりがつかめるかもしれない。

浦添市の密集住宅地にある家を訪ね、中村恭典の未亡人に神谷サト子の消息について尋ねると、思わぬ答えが返ってきた。サト子は息子の嫁だという。ということは甥と姪が従兄弟同士で結婚したこ

とになる。サト子は近所の弁当屋に仕事に出かけているという。

そこに案内してもらい、サト子に会った。サト子はもう五十五歳になるはずだが、沖縄出身の女性らしく、年齢よりはずっと若く見えた。

——神谷さんは中村さんの事務所で働き、同居もしていたそうですが……」

「働いたといっても電話番みたいなもんです。同じ所には住んでいませんが……」  
エプロン姿のサト子は働く手を休め、沖縄名物の香片茶カヌカでもてなしてくれた。だが、不意の客からの不躰よびな質問を迷惑がっているのは明らかだった。

サト子は大宜味村の事件も上京中の失踪事件も知らないと言った。とはいえ、彼女が真実を語っているかどうかは最後まで疑問だった。沖縄の門中意識の強さが、そう答えさせただけなのかもしれない。中村の妻のよねは、その門中意識に排除された被害者だったのかもしれない。サト子に会ってそんな感想も浮かんだ。

親友の弁護士と未亡人に会い、故郷を訪ねて親類の話も聞いた。後に残された手がかりは、よねが言ったジミーペーカリーの創業者とスカリーなる男に会うことだった。

現在、沖縄県内に十八店舗の食品惣菜専門スーパーを構え、年商二十八億円をあげるジミーペーカリーは一九五六（昭和三十一年）年に創業された。同社を興した稲嶺盛保は本土ではほとんど知られていないが、沖縄戦後史のなかでは隠れた立志伝中の人物となっている。

一号店は沖縄本島を南北に結ぶ大動脈の国道五八（ごっばち）号線沿いの宜野湾市大山にあり、本社を兼ねている。食欲をそそるアップルパイやローストビーフが整然と並べられた店内は、「アメリカ

カ世」時代の活力ある沖縄を感じさせ、六〇年代のアメリカの若者の青春を描いた映画「アメリカン・グラフィティ」の世界にまぎれこんだようだった。

一九三〇（昭和五）年那覇生まれの稲嶺は、沖縄敗戦の直前、食料欲しさのため、名護近くの羽地はぶぢの米軍基地で食器洗いのボーイとして働いた。郷土防衛の「護郷隊」の連中からは米軍のスパイ視され、自分の死体を埋める穴まで掘られて殺されかかったこともあった。

戦後はそのまま米軍基地に残り、ドライバーとして働いた。ジミーというニックネームは、この時代につけられた。

最初、車を使った雑貨の移動販売は、店を構えてデリカテッセン（惣菜）を扱うようになり、ジミーの店の手づくりアップルパイはやがて沖縄に欠かせない味と評判になった。業績は順調に伸び、ジミーベーカリーは、いまや戦後沖縄の一つの食文化を代表するシンボルの存在にまでなっている。

思わぬ付加価値もジミーベーカリーのブランド化に一役買った。ジミーの店の近所には芸能界入りする前の南沙織が住んでおり、愛称シンシアの彼女がハイスクール時代よく通った店だった。この話は、南沙織フリークの間では神格化されたエピソードとして都市伝説化している。

テンガロンハット姿の稲嶺とはジミー店内のコーヒーストップでのインタビュートなった。少し英語靴ブーツりのあるイントネーションが、稲嶺のこれまでの人生を語っていた。

——亡くなった中村晁兆さんと親しかったそうですね。

そう尋ねると、稲嶺は「よく知っているよ。ただ私の仕事と彼を結び付けてほしくないな。触らぬ神に祟たたりなしだよ」と言って笑った。

稲嶺は明らかに何かを知っている口ぶりだった。案の定、中村の周辺で起きたさまざまな謎めいた

事件と、これに対する私の見解を述べると、稲嶺は「一々頷いた」。

稲嶺の意味深な態度は、大宜味村の事件を扱った嘉手苳らの元刑事たちが、事件と中村の関係を匂わせた思わせぶりの言動と共通する印象があった。

しかし、稲嶺が中村とはもう関わり合いになりたくないと云っている以上、中村に関する質問をこれ以上つづけるわけにはいかなかった。

稲嶺は中村について、最後に「あれはあんまりいい印象の人間じゃなかった」とまた含みのあることを言った。

——ところで、スカリーさんという人をご存じですか。やはり中村眺兆さんと親しかった人で、ジミーの店の前にあったピザハウスでよく会っていたそうですが。

「スカリー？ ああ島繁勇のことね。うちの店の前のピザハウスは彼の貸家だった。彼は今帰仁の近くの屋我地島の生まれで、中村とは三中で一緒にやなかったかな。彼はジュークボックスを何百台と持っていて、いろんな店に貸していた」

中村よねから聞いたスカリーが、弁護士西平から話が出た中村の政治的スポンサーの島繁勇と同一人物だったとは、ジミーの話を聞くまで想像すらしなかった。

——島さんも米軍で働いていたんですか。

「そうです。でも彼に会っても喋らんでしょうね。あまりいい話じゃないし」

そんな気になる台詞を聞いた以上、よけい島に会わないわけにはいかなかった。稲嶺と別れた後、島が経営する島産業不動産がある那覇市安里の高級住宅街に向かった。だが、事務所は見当たらず、

かわりに立派な邸宅の前に、元外務大臣の中山太郎によく似た顔だちの老人が太いステッキをついて人待ち顔で立っていた。

それがスカリーこと島繁勇だった。私の訪問を予期していたような島の唐突な出現に、私は妖術でもかけられたように、その場に立ちすくんだ。数日前の電話では、脳梗塞で療養中だと言っていたが、病みあがりには見えず、口舌くつぜつもはつきりしていた。人品卑しからぬ風貌といい、仕立てのいい背広といい、私が来るのを物陰からじつと窺っていたような風情ふうぜいといい、どこか現実離れしていて、白昼夢でも見るようだった。

島はアップルパイで成功した稲嶺と同様、ジュークボックスで大儲けし、戦後オキナワンドリームの主人公になった。だが島の周囲には、そんな型通りのサクセスストーリーとはおよそ不釣り合いのどこか秘密めいた雰囲気ふんいきが漂っていた。中村より二歳年上の島は、中村と同じ三中に通い、軍作業では、配車係の中村と勝連半島突端つちめのホワイトビーチの米軍施設と一緒に働いた仲だった。

——へんなことを聞きますが、なぜ島さんはスカリーっていうんですか。

「軍作業時代、スコットランド出身の係官が付けてくれたんです」

島はこの質問に付随して「本名も島袋から島に変えたんです」と言った。

島にも稲嶺と同様、大宜味村の強盗事件から失踪事件、摩文仁の崖からの転落事故、そして最期の変死についてひと通り尋ねた。だが、答えは聞く前から大体想像がついていた。島の答えはどれも、私の疑問を満足させるものではなかった。

私は中村の疑惑を追求するあまりとんでもない勘違いをしていたのだろうか。それとも逆に、中村の関係者は全員口裏を合わせて中村の潔白を証明したのだろうか。思いは千々に乱れた。

だが、それ以上問おうという気持ちには、正直もうなれなかった。中村の謎めいた人生を追って浮かび上がった矛盾自体が戦後沖繩が辿った道筋の困難さをありのままに語っているような気がした。

中村暁兆の人生には、琉球処分後の沖繩の歴史と、戦後沖繩がもたらした精神的荒廃がそのまま語られていた。中村の友人のジミー稲嶺とスカリー島の人生には、それとは対照的に「アメリカ世」の幸福感が、一瞬の輝きとなって照り返していた。

中村よねは沖繩の門中意識の前に躓き、姪の神谷サト子は門中意識の前に沈黙した。すべて、沖繩について書かれた本では知ることができない世界だった。

中村暁兆の謎めいた人生を追って沖繩中を走り回ったこの取材で、私はもう一つの沖繩を、この目で見、この耳で聞いた。それ以上の事実を知る必要がどこにあるだろう。

謎は謎として残った。だが、このファクトファイディング（事実探索）行は不思議な充実感があった。私にとってそれは中村の謎を追求する以上に、その行程自体が知られざる沖繩を全身で実感できたかけがえのない旅となった。

沖縄 だれにも書かれなかつた戦後史 佐野眞一著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社  
定価 1,995 円（税込）

ISBN 978-4-7976-7185-8

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)